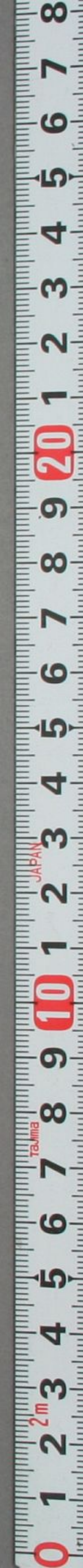


酒前茶後錄

十

大正八年四月上浣起筆

特別  
14  
1919  
326



酒前茶後録

大正八年四月十日 起筆



この所記の如く、酒のけ例の教養の爲に、因方通  
リと減ふ、四五層心の因方と、婦人のこと、出来れば、又  
方目の

一 杜工部集

四冊

十二四

これら玉切の書本と、わが心で、酒後録に、此  
の爲、茶抄を、絹表紙の、つぎ、を、在、本  
也、此の版、支那、の、支那、の、訓、を  
取、玉、の、創、を、往、上、の、痕、跡

のそのめくも所らある

一 中箱小冊 合一冊 寸珍本 七三頁

唐名もも覆刻和名七のさくさく  
海名ももハ姓女ハ千一ハ

一 日本現在書目 一冊 三四頁

宮もももも自本ハ古本信實不  
花ももも也人の校正ハもも也

一 右軍書記

二 王法帖譯文多 杉本月麻校刊本  
秋家殿の序跋あり、唐紙摺印あり

此二天竺とあるは所々拾めて稀歎あり

一 金永年表 三四頁

西田直卷天保九年出版ハ係る也未

此の年表を基とし増補ししものあり

んともこんと名をえりしことあり

ハ

一 漢代祖帖釋文 二冊 三四頁

小島知造の撰少所、家範ハ祖帖也

狩谷椿翁不承の祖帖と知造等

覆刻ししものあり、此の釋文ハ

恐らく、此帳に附帯するものなるべし  
んが今、内容も入るべし

一 漢書指南

一冊

二〇四也

此書市川連之尾の名著なる。往々言  
本として傳ふる。余の所蔵のものも漢書  
言もろくは清の著者との手澤本也  
内列の校訂を行なう佳本也

一 野田笛浦詩帖

十四の也

六形の書画帳に笛浦が種々の約  
を著きたるものなり紙数甚に多

+

考も又るべし此書首に托書意あり人  
七十九日とあり、是年壬午の卯を  
持て来此の如くらしむとあり

一 玉篇

六四也

古佚書考本全部と雖ふこと容易  
ならずんを幸ひ玉篇の部を  
を合して一冊一帙とすべしとの言  
書 早稲田の六相玉篇も此の内  
あり、余の早稲田本の複製を花  
すんも他をみるべし、此考余が架

中巻より見るに、

北巻の回考の珍重と云ふ事ありと云ふと稀観  
考の内の今なるもの多し。造りも價も不慮也  
他の未考のこと各考に價を附すこと未(四月廿日  
記)

○以上二冊又二三の正書を得る

・ 造り記

造り記の回考

三冊

造り記の造り記の回考の  
帯下りとの山形抄の

+

造り記と回考の別々のもの也

回考木芝人抄の回考也

・ 光琳万回

前後二冊四冊初編を

墨を以て摺りたるもの此者

版木存在今海布のもの

る新摺也

・ 尾形流畧印譜

文晁の序あり把一の跋あり初

編あり版面印の号も古く

味あり

・ 世観書世閑書和約

二冊



揚けり、異郷に山あり、分エトワードニ世をやり  
きおひたり、らん七エトワードニ世を河原に  
中より、さうさう、さうさう、山原に奴だ、と、  
内原久、寛見、自伝を出版せんと、余も、おれを  
用ひ、余来路之記を以つて、さうさう、内原久之を  
可とも、此の、おれ、余が二十年前、自家の、おれ、  
後、うら、余、し、さう、さう

前、崎、男、終、の、薨、す、高、田、生、め、男、の、  
又、母、赴、い、て、車、ある、を、お、れ、余、男、の、勲、等、叙、位  
を、進、ある、の、運、物、を、お、れ、大、隈、侯、滿、傳、男、に、他

と交渉し、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、  
し、て、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、  
勲、等、を、進、ある、の、難、キ、  
勲、二、等、  
て、正、二、位、  
勲、二、等、  
さう、し、時、代、の、七、の、也

和、田、守、村、鳥、居、清、長、画、美、都、朝、一、世、を、獲、取、  
し、て、男、に、領、つ、装、釘、刺、成、り、極、め、を、美、め、さ、ん、と









ハ金入絹更紗四千疋市海更紗二千疋と云ふ  
其の更紗ののり

○寸珍本更紗の白山田若林が重七と云ふ  
産を述べ一向も産の女のり、此の架中  
いまい無き中の若干を購ひ、余の寸珍を  
集めると極上にて、此の更紗、何れ  
者性七十程のむ十五程ある、此の架中  
あるもの、今が千より入るもの七三四程を  
この架中へ取するもの也、此の版式を異り、表  
寸用紙を異りする等、よも重複を成す

+

購入する耳、大本の内より秋萩の謄と云ふ一巻  
初めと云ふ所のもの也、但し一冊十内と云ふ不慮也

一秋萩の謄

秋萩の謄  
平和抄の同種

一冊

此の更紗やうに、此の更紗に、此の更紗に、  
と輯めたるもの、此の更紗に、此の更紗に、  
此の更紗に、此の更紗に、此の更紗に、

一更紗の便覧

大本

一冊

一三藏院臨定家卿古墨帖

一冊

寸珍本更紗

名所更紗

更紗

うすあき物語

寛文の 清久 一冊

若年珠集

玉乃隠語

和刻玉乃隠語の原書也

親町御遺言

長禄刊 一冊

寺中御遺言

一冊

元禄寺中御遺言

全巻善の巻

高麗の巻 二

四書

羅珠四書集注

一帙

清久重宝記

享保の

一冊

清久御遺言

外ニ唐不寸珠二行

三ツ切櫛

津藩重宝櫛三行 元禄の

大改町經

寛文の

通物便覽

新本更替の集

元禄の

此外

少森居士の書寸改帳一冊

各地の書画帳三冊

今が西下の主用ハ下村大丸之入結崎ニ有之を祝  
免为り也回顧すんハ大丸が東京の店と撤し

今から十年前のこととして此の左門の主人が早稲田  
出身であるが、當時その家の裏の裏に行く状態を  
傍視するに思ひ、~~ある~~洋のやうにして長年の下村  
が曲柄を待たせけりとの注意を興くたさう抑余  
が左門の家政を知るに業のうらに興くたさう抑余  
端々としてあるが、或は深く関係をつ  
けて今の子孫が、その左門の改革一は大きな力あ  
りしと大隈侯の依頼として結果として、侯と傍様  
に務るに就ては余の努力のききにあらうか、ある時  
下村の母ををよまてしとて早稲田の伴ひしこと

ある、余の二女が、この朝大隈侯の危機に  
入る余の家を駆けこみたることもあらう、  
数年のうちに村も泣き、自分も~~悲~~悲劇七  
かゝるや、余の家族のことと下村の~~悲~~悲劇七  
のいかにあらうかと、~~悲~~然るに近年  
高島昭次に向ひ此の二三年の間、  
益の七八十、業もさう、  
左門の債切を充てしむ、  
益の七八十、業もさう、  
左門の債切を充てしむ、  
益の七八十、業もさう、  
左門の債切を充てしむ、

下村の物をゆふることを決せしむるに  
ふきこころも前月下村の車ある者  
余るまけたる時の余もたはる長い  
いしきまををせむくはなふう  
のま君もを扱へんやも祝儀  
いかにまををせむくはなふう  
のま君もを扱へんやも祝儀  
いかにまををせむくはなふう  
のま君もを扱へんやも祝儀

式ハ五月十日午後四時より平家神宮天極殿  
挙げしる大略式の次第ハ東大社  
小果るんも東郡式に兼瑞細く時万と



下村のハハカウ歌味くく加く  
物の男性ハ指輪を新ぬる  
ぬ人の新ぬる  
式後新ぬる  
と流るる  
いふ、新ぬる  
さる本流士

大正八年五月寄ま都とあつた海女十書を  
得て此の書をばす

○京都の物宅の夜、留守中の未問を換す、中へ余  
の小栞屋に寄贈し来り小冊三あり、其大欠印譜高村  
真夫より聖教序拓本豆帖并山田鏡古の書豆帖四  
代是介より来り皆茶中にて置おくに定むるなり、其に  
折簡謝意を改す

○余多く茶葉の書を蒐集し来り茶葉と得ず保々  
桂香其の不意の本を齎らし来り示す、即寶曆年百  
兩日本に於て復刻せしむるに四冊しを夏氏三種といふ、三



種とい茶葉、酒類、琴苑の三つを夏村芳花卿の輯  
ある所、多く茶に關する花洒の逸事を羅列し後日  
故味を因る、乃ち閑に來し時寸珍冊子、膝字を  
試み今日上卷字あり、是れ又寸珍文庫中、測く可らさ  
く圖書也

○つ友原宏正の、小栞屋の豆帖を也るし何れ  
も小冊を寄贈し來り、其書考きんと求め  
らん左のありと考きし字あり也

墨裁の紙よりける中

こまひらんのせんばうり  
あういんりの林りけり





の五月十日京都、松尾の寺に紀傳を写す  
年記を以て書記の陳列を促し、余を  
於角京都へ行とて、此處より流るる  
の流りて、今其目録を以て、此に  
いぬめつら、流るる日、昔記の稀観の古  
者、京都より、目録を以て、此に  
書き、回者も、古より、流るる、  
此に、取め、古より、此に、

(五月十日記)

日本書紀 千二百年記念展觀目錄

大正八年五月十日 於第三高等學校記念館

一、古鈔本

- 一、應神紀 一卷 田中勘兵衛氏藏
- 二、推古紀 一卷 岩崎文庫藏
- 三、皇極紀 一卷 岩崎文庫藏
- 四、推古紀、皇極紀 岩崎文庫複製玻璃版 二卷 久原文庫藏
- 五、日本書紀(國寶) 廿八冊 北野文庫藏
- 六、日本書紀 卷第四、六 北野本影寫 一冊 田中勘兵衛氏藏
- 七、日本書紀 北野本寫 十八冊 田中勘兵衛氏藏
- 八、神代紀下(國寶) 一冊 向神社藏
- 九、神代紀下 向神社本寫 一冊 久原文庫藏
- 一〇、日本書紀 十五卷 熱田神宮藏
- 一一、日本書紀 熱田本影寫 二卷 京都帝國大學藏
- 一二、神代紀下 嘉吉二年書之筆者圓藏 一冊 桃木武平氏藏
- 一三、神代紀 明應八年 小槻雅久 二冊 御巫清白氏藏
- 一四、神代紀下 文龜三載初夏記之抄(花押) 一冊 桃木武平氏藏
- 一五、神代紀 上 永正七年十二月日大中原國忠 一冊 御巫清白氏藏
- 一六、日本書紀 卷第一至三(一筆本) 三冊 北野文庫藏
- 一七、神代紀 二冊 桃木武平氏藏
- 一八、神代紀 上 一冊 桃木武平氏藏
- 一九、神代紀 二冊 帝國圖書館藏
- 二〇、神代紀 二冊 桃木武平氏藏
- 二一、神代紀 二冊 京都帝國大學藏
- 二二、神代紀 二冊 京都帝國大學藏
- 二三、神代紀 慶長二年 三善盛政書之 一冊 帝國圖書館藏
- 二四、神代紀 慶長巳亥(四手)下部朝臣兼見(印) 二冊 仁和寺藏
- 二五、神代紀 慶長九甲辰年 祐傳(花押) 二冊 桃木武平氏藏
- 二六、日本書紀 今非似開書入本 十六冊 賀茂別雷神社藏
- 二七、日本書紀 享保十年 中臣連重寫 三十冊 鈴鹿義鯨氏藏
- 二八、日本書紀 六冊 桃木武平氏藏
- 二九、日本書紀 卷第三、古七三 前田家本影寫 四冊 京都帝國大學藏
- 三〇、日本書紀 卷第十一 前田家本複製玻璃版 一卷 京都帝國大學藏
- 三一、日本書紀 玉屋本寫 三冊 御巫清白氏藏
- 三二、假名日本紀 傳船橋國寶 藤波種忠筆 三十冊 田中勘兵衛氏藏
- 三三、假名日本紀 寬文元年 杉原盛安寫 三冊(內四冊) 賀茂別雷神社藏
- 三四、假字日本紀 享保三初春上旬 香河景房書寫 二十冊 大阪府立圖書館藏
- 三五、假名日本紀 正慶本影寫 零本 一冊 東京帝國大學藏

二、刊本

- 三六、日本書紀 慶長十五年活字版 十四冊 神宮文庫藏
- 三七、日本書紀 慶長十五年活字版 十冊 田中勘兵衛氏藏
- 三八、日本書紀 慶長十五年活字版 八冊 京都帝國大學藏
- 三九、日本書紀 整版(慶長活字版覆刻) 十五冊 久原文庫藏
- 四〇、日本書紀 整版(右二同シ) 十五冊 鈴鹿義鯨氏藏
- 四一、日本書紀 寬文九年刊 十五冊 鈴鹿義鯨氏藏
- 四二、日本書紀 整版(寬文版覆刻) 十五冊 桃木武平氏藏
- 四三、日本書紀 加藤子萬傳、上田秋成等書入本 十五冊 神宮文庫藏
- 四四、日本書紀 享保三年刊 小寺清先校 十五冊 鈴鹿義鯨氏藏
- 四五、日本書紀 文政三年 黒羽領主大關增業刊 十六冊 京都帝國大學藏
- 四六、日本書紀 元治元年刊 十五冊 桃木武平氏藏

三、註解書

- 四七、日本書紀 元治元年刊 澤澤摺 六冊 桃木武平氏藏
- 四八、神代紀 勅版 慶長四年 活字版 一冊 子爵吉田良兼氏藏
- 四九、神代紀 勅版 慶長四年 活字版 二冊 神宮文庫藏
- 五〇、神代紀 勅版 慶長四年 活字版 一冊 京都帝國大學藏
- 五一、神代紀 銅活字版 二冊 和田維四郎氏藏
- 五二、神代紀 活字版 二冊 京都帝國大學藏
- 五三、神代紀 寬文七年刊 二冊 鈴鹿義鯨氏藏
- 五四、(預書)神代紀 延寶七年刊 二冊 北野文庫藏
- 五五、神代紀 元祿八年刊 松下見林校 二冊 公爵近衛文麿氏藏
- 五六、神代紀 寶永六年刊 二冊 北野文庫藏
- 五七、(無點)神代紀 寶永六年刊(前書ト異版) 二冊 鈴鹿義鯨氏藏
- 五八、神代紀 享保三年刊 小形本 一冊 鈴鹿義鯨氏藏
- 五九、神代紀 享保十四年刊 鳥谷長庸校 二冊 北野文庫藏
- 六〇、神代紀 下御覽社版 二冊 鈴鹿義鯨氏藏
- 六一、神代紀 山崎闇齋改正 二冊 北野文庫藏
- 六二、神代紀 梨木祐之改正 二冊 久原文庫藏
- 六三、神代紀 水野忠興轉刻 丹波書本 二冊 京都帝國大學藏
- 六四、神代紀 整版 加藤子萬傳手校本 二冊 桃木武平氏藏
- 六五、校正神代紀 整版 二冊 桃木武平氏藏
- 六六、神代紀 校合本 二冊 木野戶勝隆氏藏
- 六七、神代紀 下御覽社版 一冊 鈴鹿義鯨氏藏
- 六八、假名神代紀 享保四年刊 四冊 公爵近衛文麿氏藏
- 六九、日本書紀私記 應永三十五年寫 一冊 御巫清白氏藏
- 七〇、弘仁私記 古寫本 一冊 神宮文庫藏
- 七一、釋日本紀 古寫本 十冊 田中勘兵衛氏藏
- 七二、日本書紀纂疏 大永六、七年寫之 三冊 兩足院藏
- 七三、日本書紀纂疏 弘治元年日然寫 三冊 神宮文庫藏
- 七四、日本書紀纂疏 古寫本 二冊 御巫清白氏藏
- 七五、日本書紀纂疏 刊本 八冊 京都帝國大學藏
- 七六、神代紀抄 天文五年書之 二冊 久原文庫藏
- 七七、神代紀抄 弘治丁巳(三年)寫 通靈子 二冊 兩足院藏
- 七八、神代紀抄 寬永元甲子仲秋 片雲院 三冊 兩足院藏
- 七九、神代紀抄 寬永十七年刊 七冊 久原文庫藏
- 八〇、日本書紀抄 古寫本 清原家舊藏 一冊 京都帝國大學藏
- 八一、日本書紀抄 古寫本 三冊 田中勘兵衛氏藏
- 八二、日本書紀抄 活字版 二冊 吉澤義則氏藏
- 八三、日本紀開書 古寫本 下部兼右譯 三冊 久原文庫藏
- 八四、日本書紀通證 谷川土清著 寶曆十二年刊 廿三冊 京都帝國大學藏
- 八五、書紀集解 河村秀模自筆稿本 十三冊 名古屋市役所藏
- 八六、書紀集解 天明五年刊 二十冊 京都帝國大學藏
- 八七、日本書紀訓考 關四郎大著 明治十九年刊 十冊 京都帝國大學藏
- 八八、日本紀標註 數田年治著 明治二十四年刊 廿六冊 京都帝國大學藏

四、雜

- 八九、日本紀神代系圖 古寫本 一卷 田中勘兵衛氏藏
- 九〇、日本紀分類 寬永十二年寫本 廿六冊 公爵近衛文麿氏藏
- 九一、日本書紀考訂 徳川光圀著 寫本 二冊 公爵近衛文麿氏藏
- 九二、日本書紀曆考 貞享二年 保井兼哲自筆 一冊 神宮文庫藏
- 九三、日本書紀曆考 元祿五年 保井兼哲自筆 一冊 神宮文庫藏
- 九四、日本紀音義 下卷 元祿五年 青木永弘寫 一冊 賀茂別雷神社藏
- 九五、記紀萬葉總類語集 城戸千鶴撰 寫本 二十冊 北野文庫藏
- 九六、書紀見要 享永七年 内藤廣前自筆稿本 十冊 久原文庫藏

5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1



の五月十日京都に於て皇太后御紀傳纂修千二百年紀念会として書紀の陳列會催しあり、余も  
於用事部より行きたりて、此會の日迄滞在す  
る所なりしに、今日皇太后御紀傳纂修の事

大正八年五月十日(京都)

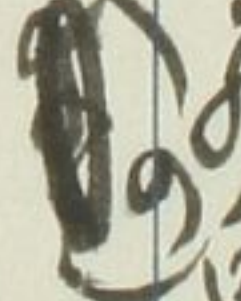
日本書紀  
編纂  
千二百年紀念展觀目錄

○風流野鷹傳とある寸珍流宮をたのむ幸田春は  
の女也と云ふ所の事也其の事喜改と思はる所あり  
女ありハ文ある所風に傳ふて男女の情態を叙し  
るもの事也其出版を忌みずと云へく自序に  
春陽電出版を躊躇しと云ふ事也此の寸珍を  
奥付にもなき元來也個快る方々也寸珍の  
事ありと云ふ事也婦をハ精進屋と云ふ事  
○此の五年ハ精進屋の前の一節を以て  
傳ふに陰五等傳の事也其の事なき事也  
或年披ふ事ぬは時々の事也其の事

撥得衛且陽王子素牙裁美軸巻  
中巻

架臥床上列中巻ハ関風清言事  
撰ハ御陽王太子素牙使披瀛傳也  
云

余前巻を可とす、後巻強し中巻の真相を云  
す、而して余の印つてまはさず  
○今次の物語者母の病を聞つて丹美の家にお  
す、二日す、女は從母を見、二枚打扉風  
あり、就してんハ高座の山あり、糸山時

の題後より印を諦視して余が先以て四時柱  
香を以て獲りたる雷岩自刻の印の捺しあり  
をえり余を古にふよし、縦令雷岩自刻  
捺ししとすも用ひざる印に實に殊とするは  
是れが文人一時の印興つるを印を刻し之れを思  
はるること得るあり、紐に後款を溯るるもの如き  
古画に捺しあるをんか、**其**其人の印をを添する  
に由りし、此の扉に余の收得印を裏書  
するの左方日と滑ありし、**左方**  **其**家又在  
この余のちよきふちより、余怒るん文人に流

+

して云くやまふか丸席ぬをぬく保むせよと  
この中の道邊の美侯の大印におびつ幼時  
目に増んたる少少を撰り且つ先代の出仕し  
る代名を<sup>の遺址</sup>の<sup>の</sup>物道の傍瑞考を言り也  
其ふ、木曾川の犬返り、目或は可観人たるを  
よふありし、人之人とラインのに比す也  
此較實しきとゆなり、同代官所の遺址今  
ハ桑田に爰し痕跡を存せりと、**道邊**又同  
此行<sup>の</sup>會心を感じたるハ、**桑田**を頼みたる  
農夫の其の性をふるめてえんか、**腕白**時代の

校つら反を(うら)しことらうと、道は今昔の感概  
想をへし

○今次の帰省例の寸珍帖を暫く高橋桂重博士  
赤城とて押漕せしあり、赤城前白川山内をゆえ  
橋と書ししを其の代り書を定す桂重の名字  
：尺璧非寶の四字をを書き、山内地名を小  
きく尺璧玉三々の次句寸陰是競うることある寸の  
書き意を言ひし利うせざる也。此にキワトキし、  
海校うると一足す

+

人々中紙の人々多く愛護して書おの好誦也  
今次の由看刊る意の法柄とらうとを  
と聊の愉快とをえし、其の由は、  
行初めを余に此の言おあると  
物のおき、○の感し、○輯めし、○出脚部註に  
出まへし、○を余笑つてお手入るるが  
○其のは、○年依例の校るるに、○跡み、○新、○度  
この日、○旅、○館と興つる、○年、○行、○李、○と、○一、○巻  
を出し、○示、○す、と、○入、○ん、○、○前、○時、○男、○、○前、○年、○某、○校  
反の子才を早橋ゆえ、○入、○の、○と、○人、○と、○輯

旋し首を更ぬと云をせざるの徳を可なり  
し高田の前崎に居たり者其れに禁し七巻  
中一巻の其のさうするもの格におれとすもあ  
らんと前崎より高田の者其れを後みぬべし  
と推量し三尺むらうの者其れに朱筆を以て毎  
字の傍ら楷字をのりきこむるや珍き事  
田の奥にそとんと然におまじしおれとす  
りるこ前崎に世年高田の者其れを後み難き  
事聞へしことあり、他人もあんとを注し  
七のそと男爵の性格もあらしおれとす

おうくも感し

高田の自家の古の拙りつと一説と語り  
出づるがと又おれしめ其れを後み難き  
而の押さもと解又事もの二三一と足  
らざる時認めざる字に家書に後み  
りざるを家の下女もの女言あるもの  
りえんをええおし後誤りあると指摘し  
たるは侍婢の問うし者きこむることあ  
りこそそのそ一笑あり

○余の初めに入るや毎次友人を齋に酒を



2 根... 此の... 今... 二... 酒... 紙... 書... 絹... 一... 果... 大... 一... 紙... 掲...



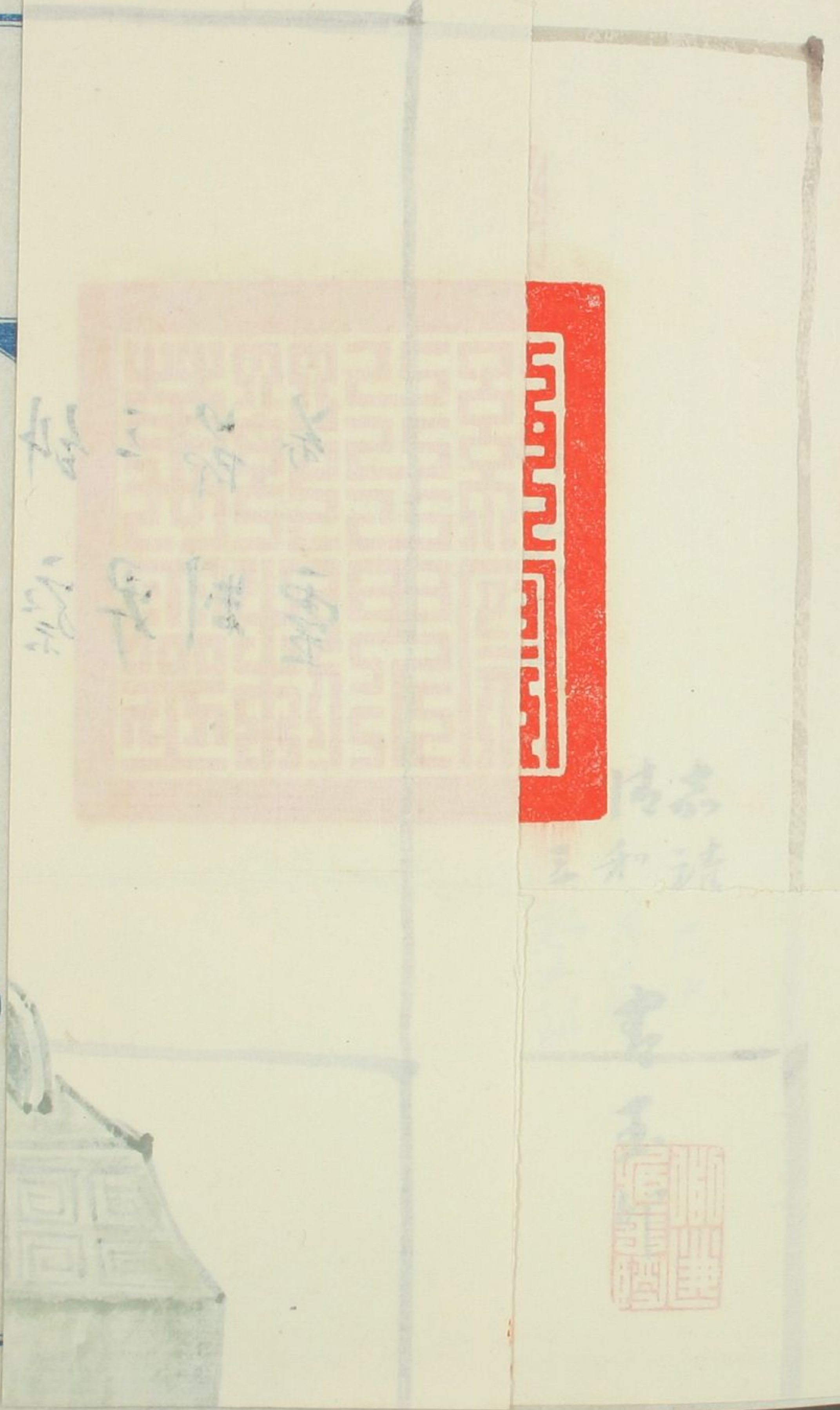
此の... 遠... 断... 碎... 其... 静... 静... 長... 互... 目... 田... 花... 保...

この書をたておのづから持味あり、余の煩を解  
せざる所以也

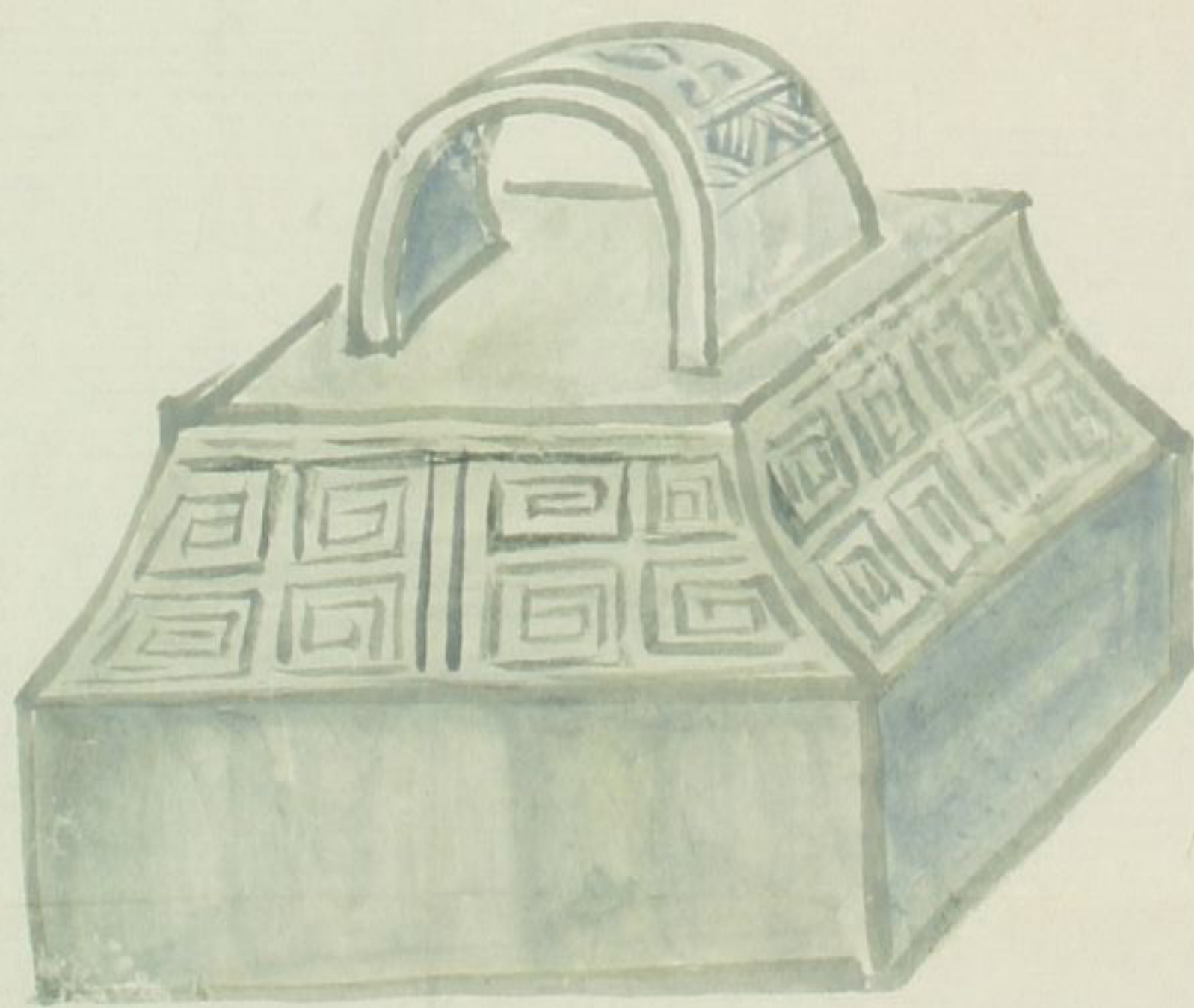
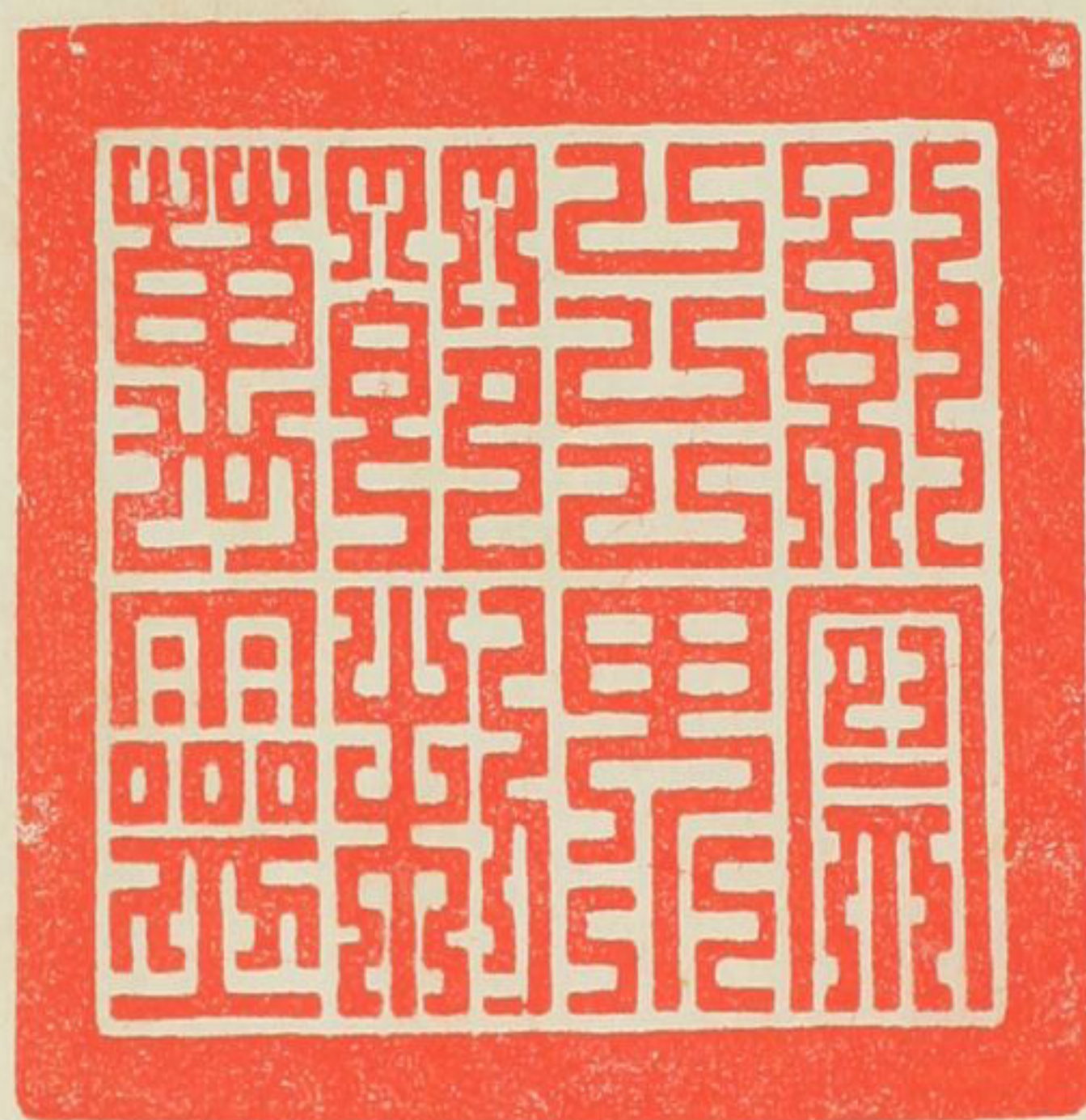
○北行印林二款を削らし高橋桂重に傳せし物  
唐の三書を刻せんことを囑り、桂重を以てし、後  
は印三款あり、印裂を賜ふ則ち左より收む  
る也のこゝろなり、

○冊美に宿し一紙不閑を得たり、其の收録こころ  
父祖の遺印并に主なる書所の刻に係る、水滸  
豪傑人名印を治りて自ら推の世帯の印冊  
に捺し三冊の寸珍印謄を得たり、乃ち水滸二

+



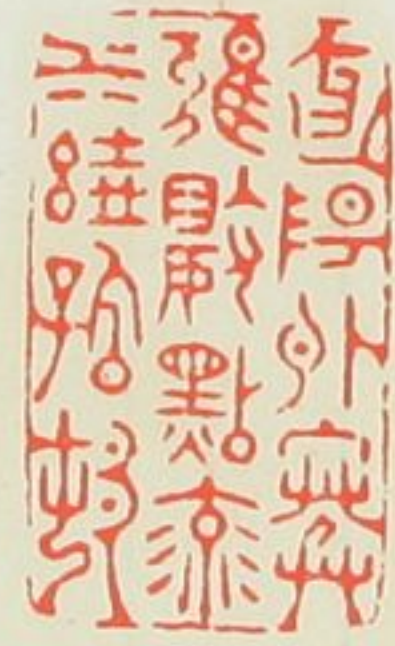
糾 三 糾  
 系 節 界 系  
 靈 制 界 系



書玉印

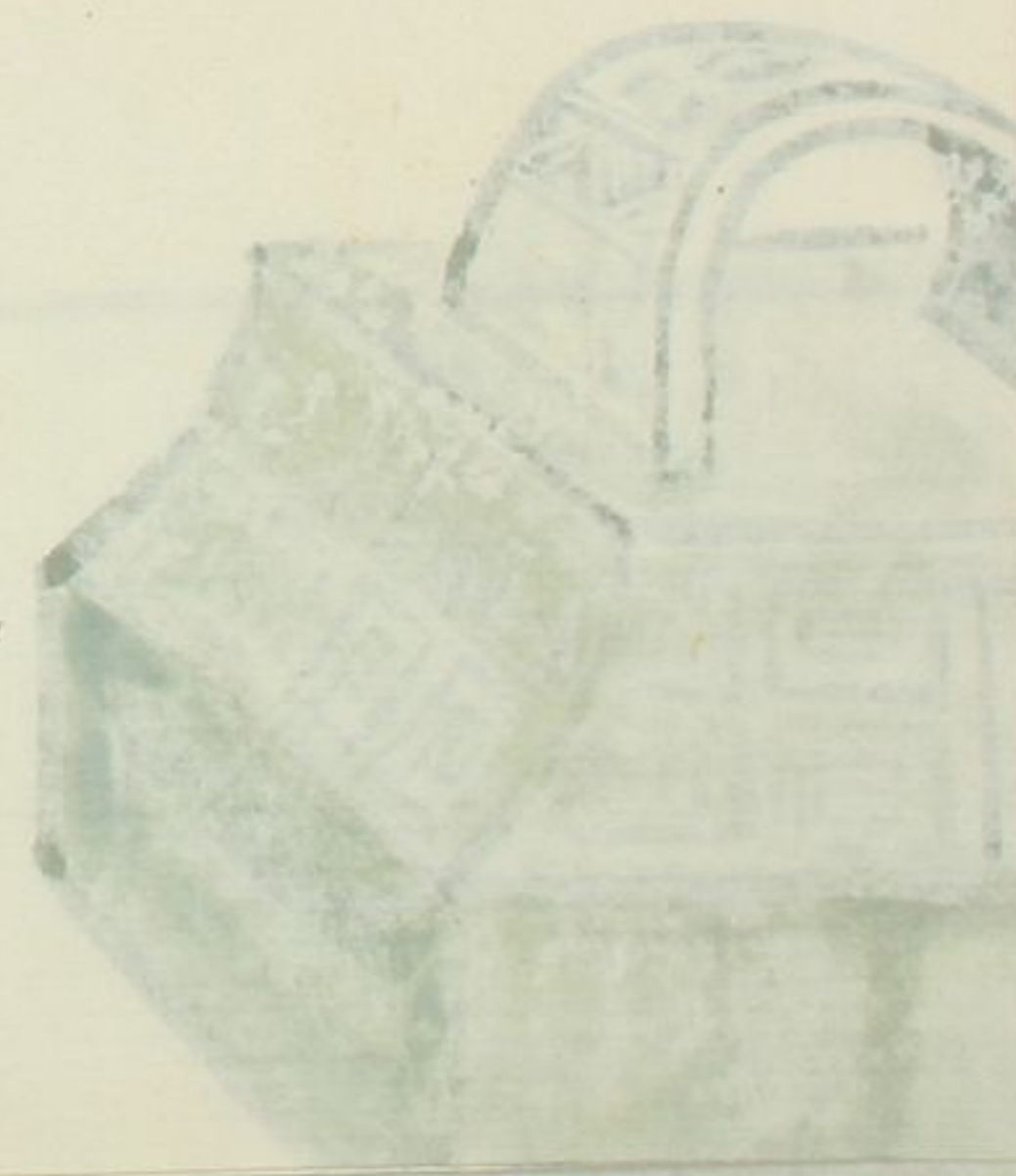
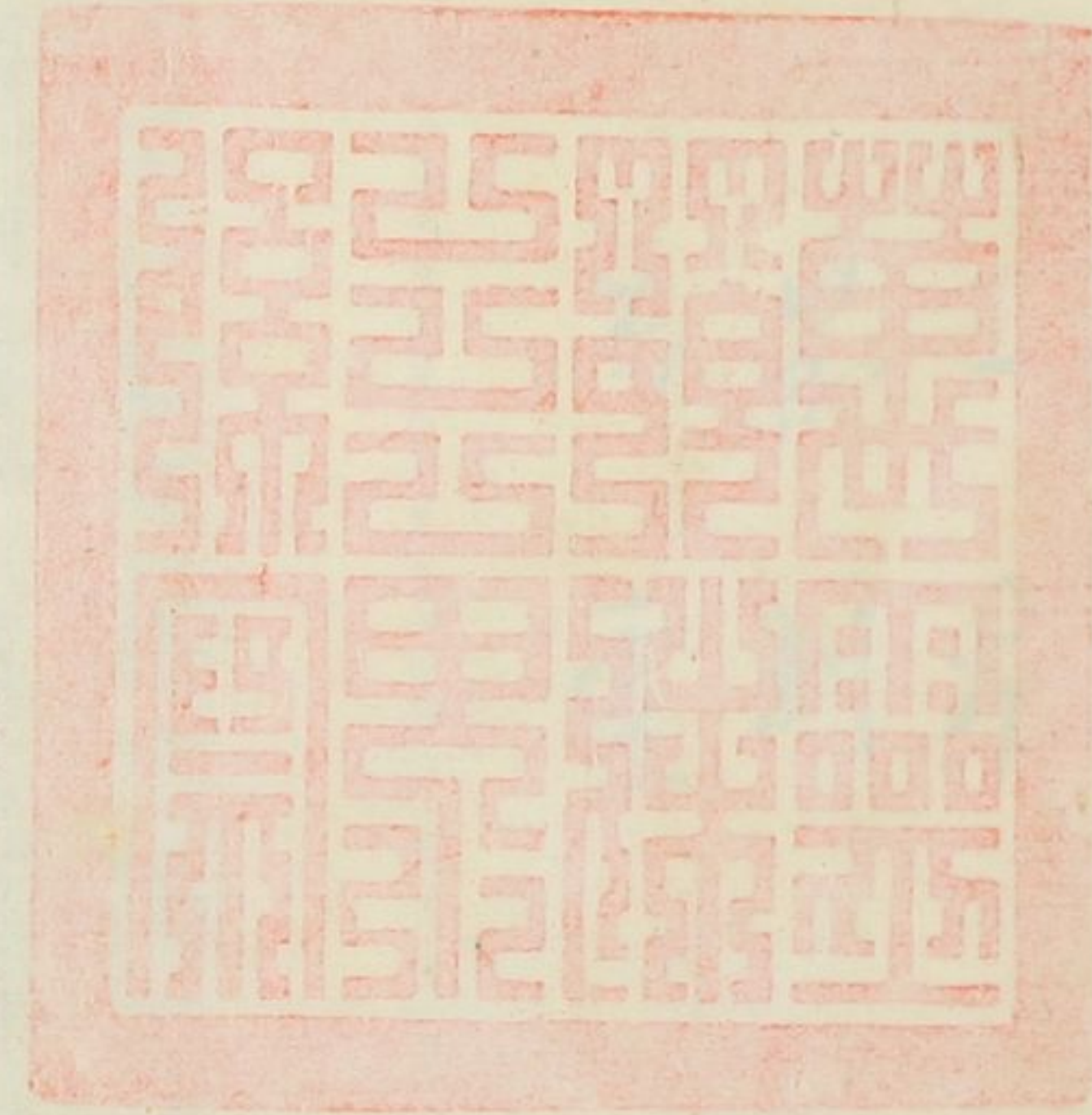


豪華人名印を治るに自ら推の世帯の十冊  
 に捺し三冊の寸珍印謄を得たり乃ち水滸二



斜陽外寒鴉  
數點遠水繞  
孤堤

清和月象  
三梅文如



Faint vertical text or signature in the lower left of the right page.

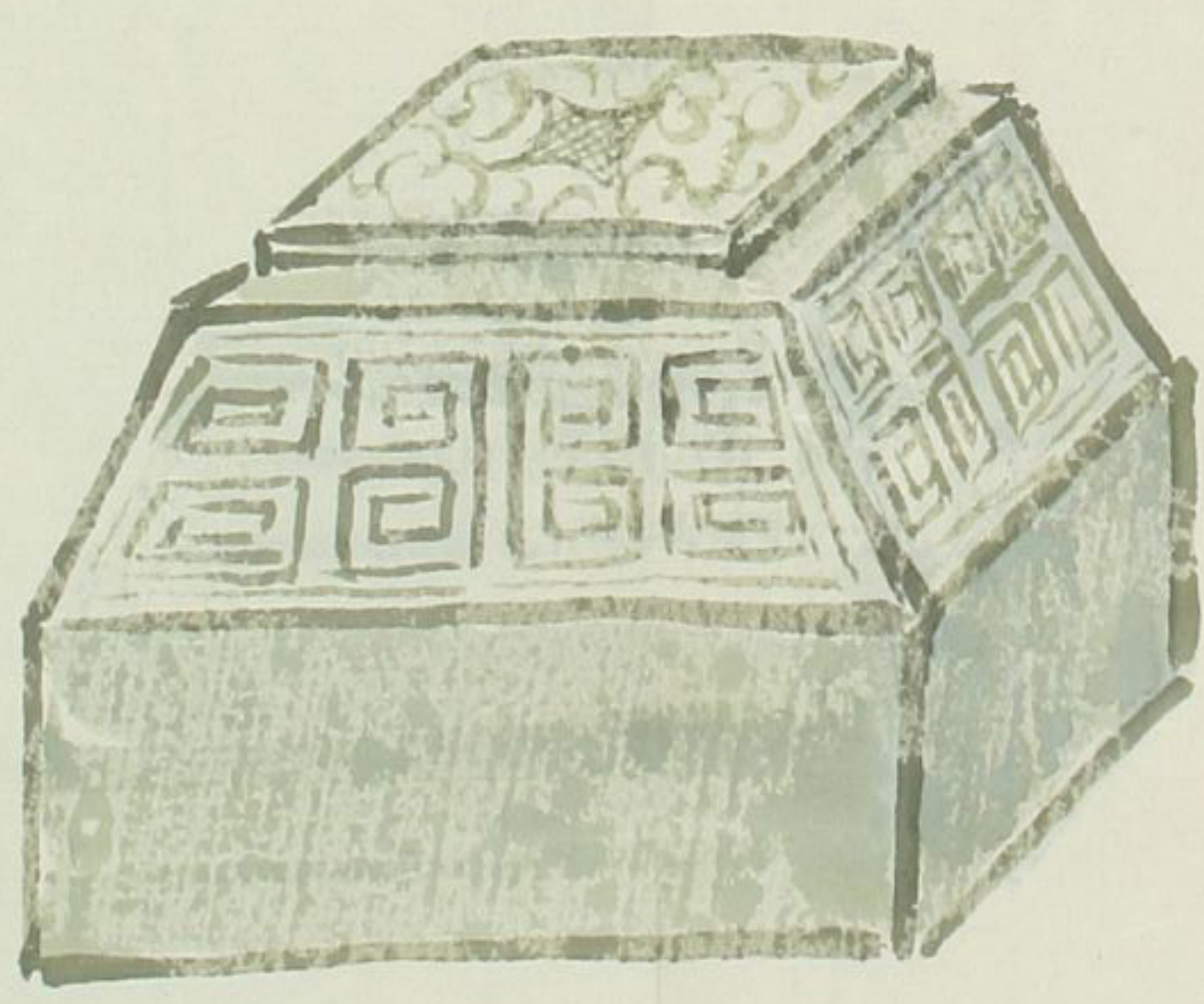


余子北院川清印所存此の社長多印創の  
 以て見よしと書れり美也



子、相  
 用、之

古人片許解



青玉印



冊、光化の印譜一冊題して遷善館印譜とす

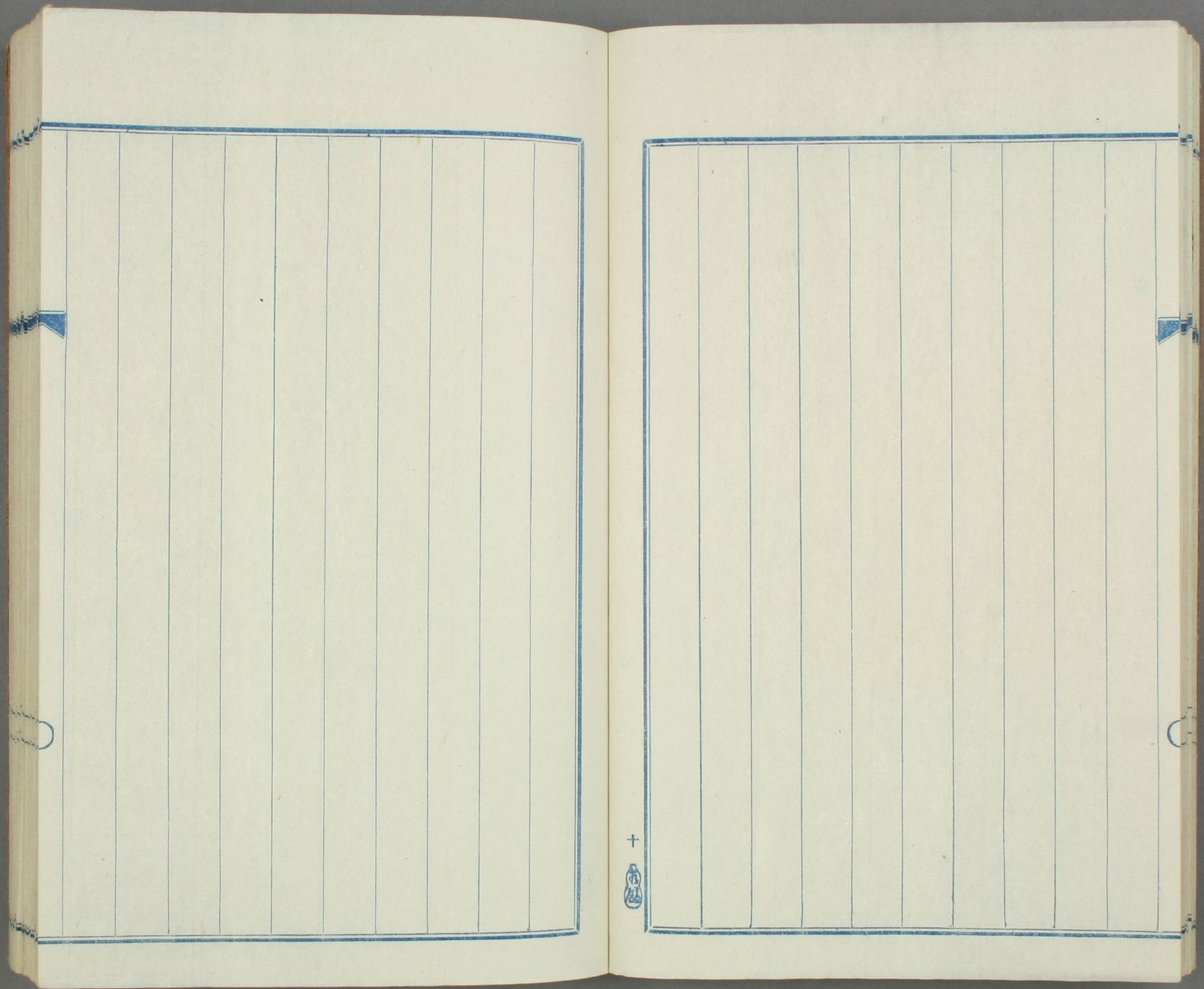


Seisenkan In

○冊共家と稱するニ夜着の御方御中未だ教育舎  
あり分ちの余の道に於て冊共の御成なる冊共互  
平きう人をせりし地を以て臨み二層の海濱と  
もとのすある、余の教育舎なる一程の形式仿  
はり講堂もあつて、冠形式あり余のこれをぬま  
かこそのを辞す、今持る方持てにせり冊共七  
六の流すしとす、余漸ゆく識し約して里と余  
の如き私学の衝にありしもの、又その所恐る  
教育舎なる人々のを脱俗のこころをすえんん  
荒し脱俗しとす、んん田村人の又兼とす







+



の余寸珍をを集めて信ら四ツ切本帯ら模本と五  
十餘種留りて解んてそのを得る而して錦縞一巻  
を求め得ず漸く此頃より名を乞ふるに及りて  
ありてを辨ひぬる、此方の海ありてを乞ふるに  
此年宮大波に刊行にうへる

○今此の朝此以中身をを平ん塩原とありてゆき  
西那須の乃木神社と辨くはありてを考れ  
端々考きつけてありてせむる

皆塩原のゆき西那須の乃木神社  
よし

其の凡そらよしくわいせい

一重のゆき

乃木の才といふ大鏡集此ありて細く出  
て米あげむるの中にいんを免料を手  
つめありて妻ありてありてありて  
いんありてありてありてありて

大鏡の乃木の才をいへて農家の生活と  
いとうありてありてありてありてありて  
ありてありてありてありてありてありて  
ありてありてありてありてありてありて  
ありてありてありてありてありてありて



あるを顧みても、地方の又野を判する一標準  
の食糧に西洋料理を出す出さぬと云ふ事、但し  
西洋料理を出す旅館割烹店の未だ跡を  
脱せぬ北地西洋と云ふことと一生共死  
なり

○余爾後、この地を車中、此の好の事務所  
長に會し、自的施設を交へ、終る教育の今後  
を論し、自況を陳す、事務所、同感と表し  
返答に、増修を要す、不以て、此の好に於ける  
一二の事、實を授け、余の論據を助くる材料

+

と云ふ、其の言を、その、此の、返り、其の、校長  
の、性、犯罪、行、め、を、見、一、校、長、一、返、答、に、  
其の、心、を、其、其、を、私、請、し、一、汽、車、の、回、教  
券、を、送、り、し、了、教、員、と、増、修、其、に、し、し、を  
得、し、六、支、に、早、と、を、要、す

○回、家、と、云、う、は、一、港、政、品、比、野、社、務、本、日  
の、友、の、林、七、賢、の、回、一、返、答、の、書、と、所、を、し、  
有、り、し、前、年、港、政、に、送、り、し、海、一、説、し、  
が、余、の、兄、を、前、に、或、る、人、七、賢、の、面、部、に、墨  
汁、を、塗、抹、せ、し、格、多、し、あ、う、修、補、と、名、の、

苦心を以て来終る事をぬきえり、余の日記し  
此時の主流をたうるを、評記をせんが君臨  
を亦せざる禮に受けけり、此ころ舊書死書表を  
中々加くして出版しつゝ、前田香雪の後素  
淡書の中三巻を削るに、香雪の内務省の  
嘱託を以てあつたの墨ぬきのお話、其うを  
歎末洋記し、**最初関西殊に素印**  
この書は尾に此書を圓りたること誰んか  
引受けしことあり終るに素印の修補の人を  
承るることあり、**何人が之れを受けいひや**

+

と云ふに勝矢久司と云ふ人をも合記するに  
用うて振をえりたること一思ふんことを其の  
方は内務省の官吏も誤らざるしと云  
ふ、**素印七角七織字も補筆をみするに彼**  
**れうぬく復舊を得たるに成り**と云ふへし、  
同じ此本の権り時、此勝矢と云ふ人の位記  
すべしと云ふ也、遺忘に備ふるに、こゝに其人の  
氏名を採す、と云ふ  
○この大隈侯、随伴と横濱有卿、松久等を  
折侯、東宮の湯し、時の事を仔細に記す

曰く

自分、東宮御所、拜謁を賜はる時、一場の溝渎  
じりお話を申上ることぶ、幾人と横例とらう  
て居つて殿下、於ては御期待あり、先頃の御成  
年式より自分身体不自由のゆゑ、冬、●列目せ  
さりしに、傍う時、お答言、冬、●列目せ  
る所、此、お特に御を問、於ては拜謁を賜  
はり、例のこと、何か話をとの御説あり、自分  
ハ、位を謹んてお受とて、三十分計り、愚  
説を申上げ、此、其の要領、今、この溝和合

+  
+

誠、於て獨逸、對する、英米佛の態、が  
の各々異なることを説き、維新の際、幕  
府の度分、その薩長、各々其の態、が、後  
世のお世のあつたこと、より比較し、獨  
逸と幕府を比し、佛と長州、米を薩に  
比し、薩、幕府と婚姻、此、血縁上の關  
係のあり、倒幕後、徳川家の家人の関  
しては、自づから、寛く、と得ず、即ち徳  
川家に對し、あつたる幕府、乃、むる二十、幕  
府を、與ふべし、と主張、し、る、禮、さう、とん、米







たる井山の自筆の稿を複製して  
その西園の山城の地名即ち井山室の  
家のある所、井山晚年、後和代  
文化のこころを此の稿より西園に作  
す所のこの此の稿ある所以、此の稿  
部を限り出版し、七と此の稿を  
車乗こ見ると、極く稀なり

一 大泉行 高橋克庵 江戸の人 南の探偵多く  
飯坂三来り 或は三島見り

著者克庵いまだ何人をも以て  
す、源村の稿の文集、此人を以て

るの稿又を載す、此人出所の大泉  
に到る途に、次、此の稿に、おふ、此の稿大  
部合、此の稿に、此の稿に、此の稿に  
著者家の名、此の稿に、又、此の稿に、此の稿に  
：此の稿の、此の稿に、此の稿に、此の稿に

一 吉原十三時

著者(吉原)の、此の稿に、此の稿に、此の稿に  
の、此の稿に、此の稿に、此の稿に、此の稿に  
り、此の稿に、此の稿に、此の稿に、此の稿に  
此の稿に、此の稿に、此の稿に、此の稿に



おもとを罵倒するも七少のうらみなど人を思ふも  
か一笑を借さしある所は滋味のあらさ  
○西本三郎と云ふ校する不幸一耳齟齬して生  
計の道と笑ひし氣にし毒るんか前年の時節  
別命花入んを校正方と云ふ今日に及ぶと  
頃穢き一田郊外に遊び大毒海客に酒めを借  
しとる折川本も其の由にかうそくしか家内  
上中具るとして一功の流儀を成るにふゆん  
ど坊も相去流儀の大の替物るるをも甘中のお  
飽とそ日飽とそ嘲笑するを龍舟のころとそ

妨害とい思ひのう流儀を聴て打負つし居ると誤  
り着て取り、まうく流儀を容れり止めたるは  
満て大弱りるを少ゆるをば飽とそるること  
と彼んを知らしめ得べきはと云ふすもの  
かおこりやう、余の米わ中<sup>中</sup>の眼中無人とあ  
かゝる地人眼中一人あり、耳中人無きことと  
まのそ一笑あり

○横井晴冬<sup>冬</sup>の貴し子春命を、故吉田博士の暇  
侍と考へしめんとして折簡して時とふとあし  
すんことを求めん期に送んひす



この見取紙は其の通り我儘出来ず仲先より  
遠慮ある間物さへども、徳文先生の覚悟を乞  
ひ余を義絶を助行せんとすと、山田先生士行  
のあるち改訂の事是れに由る出法し士行に自米  
を従へんかおのゝまむむと余命の事を言ひ手  
もつけく九段を取らぬ山田も義絶をいつてし  
つりやうと語りぬ、士行の友人七山の回交のり  
も徳文先生の相睡き今一二の外はのくよもの  
うしとまゝ、さ道達の助行ハ或ハ六段の行  
子とまゝん七段のお歸し利産此子を絶

たさんのおし道ハ終る此の頃と一命を縮ち  
あとのいゝるまゝの助行~~ま~~まことんじしと  
さる也あり道ハ前以終村抱月さるつ入と決  
常の甲ふと共ゆ折角合はるる又氣を場を  
を解散せしむ可くさることさるる、~~行~~行を義  
義子に煩ハヤること抱月の場を信し好の  
あつ、さし道ハもつて不果の人也

○新聞社の譲り海の場を其の購読者の数を  
如何に代償し換り弄するかと云ふれ其の経験  
しらも、~~行~~行社をさるる一定の換り弄する



例の滑紙をうすくし、文をとりて、意の換紙を  
 用ひ、その中をうすくし、文をとりて、意の換紙を  
 大津繪をも出し、此の換紙を紙の質をまじり、その  
 換紙をとりて、上出来る。此の原紙の形も、繪  
 の刷毛を以て、あつて、色を施さんとする  
 所、其の形を切りぬき、その原紙をあらへ、刷毛  
 を移るをも、塗りぬき、その原紙をあらへ、刷毛  
 と、まじり、その原紙をあらへ、刷毛を塗りぬき、  
 れぬ、その原紙をあらへ、刷毛を塗りぬき、  
 れぬ、その原紙をあらへ、刷毛を塗りぬき、

く

大津繪の發生は寛永正保の際にして、大谷に近き  
 池の川といふ處に繪佛を描きたるにあり、寛永元年  
 十一月、西本願寺主准如が大谷に龍谷山と命名せし  
 は、此處に群參する信徒の漸く多からんとする景況  
 を卜すべく、當所の繁昌は大津繪の發生を促せるに  
 もあらんか。傳存せる大津繪にして天和以前と推定  
 さるゝものは、阿彌陀乃至三尊佛なるを以ても、大  
 谷の繁昌に副生せる繪佛が、後來の大津繪なること  
 を證せずや、大津繪が元祿の前後までも追分繪とも  
 云はれたるも、京都と伏見との追分にて鬻賣せられ  
 たるが爲めにして、是れ亦た大谷詣を見當てとせし  
 佛の残れるやうにも思はる。斯く繪佛を主とすべき  
 大津繪は、貞享以後は販路彌々擴まり、往來の旅人  
 にも購はるゝに至り、圖様は逸早く發生當時の状態  
 を脱し、需要のまゝに變化しながらも、其の粗放に  
 して簡朴なる描法を傳へて特色とせり、享保度に入  
 りては世の好尚も移り、特に浮世繪の發達著しく、

やがて大津繪の衰頽を來し、漸く新意匠なく、新圖  
 様なからんとし、遂に窠臼に墮するを致せり。故に  
 後來の大津繪に對する鑒賞は現代的ならず、只管に  
 過去のものとして其の簡古撲茂なるを愛せるのみ。  
 更に化政度に至りて大津繪の袋入が發賣せらるゝや  
 圖様に十種あるのみなりしといふ、大津繪節に唄は  
 るゝ圖様の尠き所以を察すべし。時代の下れる文化  
 文政は斯の如し、然らば時代の上れる元祿寶永は如  
 何といふに、『松の落葉』に擧げたる圖様は繪佛を除  
 けば十種に足らず、天和正徳の間は大津繪の開展季  
 と思はるゝに、其の盛況を知るべきものはあらず。  
 此の『大津土産』は安永度のものながら、好事のま  
 まに懇に誂へしほどに、恰も舊圖古畫を復寫裝幀せ  
 るばかりの時とて、粉本の數を盡して揮灑せしにも  
 あらんか。故に前後に求むべからざる大津繪開展季  
 の景況を傳ふるものとも云ひ得るに庶幾し。  
 本書の筆者權次の前に又平久吉、後に彌平道則とい  
 ふがありとも聞けり、元來大津繪の最初の筆者又平  
 に關する傳説の信據し難く、巢林子が『傾城反魂香』

の脚色に依りて、俗間の臆測を長せしめしも、大津繪の筆者を考定せんことは恐くは徒勞なるべし。大津繪は天和に於て全圖を墨刷にしたりと云へば、筆彩色が何時かカツバ摺に進みしなるべく、斯る數物の扱ひとしては誠にさる必要を感ずることも切實なるべければ、特にカツバ摺が大津繪の爲めに創意せられざるなしとせず、唯だ之を考定し得ざるを遺憾とす、(以上二項三田村鳶魚氏記)

今回配本の豫定なりし『風流謠年代記』は都合に依り次回に譲ることとせり。

すことしな法しはも女望を流せり一頁の上と時  
 訓すは室のさきも遊に女刻くはももえくおと  
 んこんする内例の通り或る有人例も油俣法  
 ちと知り、高田を説き余は油俣せしめんと業  
 一はも余の高田に對し油俣を辭しは、今休

○前に稱しは道遠と義子の  
 の件は四より前も道遠  
 士行に離れつるを絶境  
 し、荒干の歌をを  
 一は合家をせり

奴姫の詞題傳人の茶家さんまきりあつちお。又  
 道遠が合家をさむるやとまゝ寛大の擧ぎよ  
 油俣さかきまの地あるよ七あゝか。自然  
 ちをおつちと家と空さし印つて事の縁  
 料と醜すこと、ちるんハ、余の飽きも干眞  
 せさるこし、まし、山田傳心ハ、余の心、  
 と傳くまゝ道遠の謝表をまじし耳ぬり、但し  
 あり迄とて事并さくし、ちるんハ、  
 一は、  
 昔くち、似し道遠の決心を動さん



ハ其ノ旨ヲ知ルノ故目、對テ有ル方略ボスル(キミズ)六月二日(記)

の内書又竟の自叙傳七卷五六十枚帰者前  
三卷枚を校訂正せしむ帰京後四多ある  
に海り残る四卷五十一枚を校正しりりれ  
り大伴ハ文章の詭秘を互して其のよみ、從れ  
皇太后御大御所の御記の事ある山に記す  
能くハ無効味ある事、ある数頁者ききし  
ことと序言に決んたること数頁を補ひれ  
る耳、而後あるの興味ある、内書ハ其のく

克己の人物も其の言事も異なりたり其年の  
経歴ハおもむき記ありて一貫す、少ありも子供  
ニ示して其の意の由也、亦り及ぶニ感懐と題  
す一編あり、えんやも子供の一談とあるは  
是語論也又書あり也 (六月二日(記))

○文林陳淡染くろ田辺の行と世説に於て  
其二月に年三十四の、進出ん事とあるも車  
清しと稱定のもるる田邊及ぶ、こんを淡者  
ニ云ふけりしとを後續を要めし事、他人  
ニ事記せしめし其に掲載し得ん、其書の





人をとらむ草をさしとて美くしき

若菜の島雨に

孰ほゆふ取よ夜寒のささおけ

あえら骨をさしとてよみとね寒をうけ

● 板橋

かきまや江戸見と鷹のゆり枝

花の陰うみさんちおきくけ

昔の望海のや花をう開けはいとせ

さきうつけと音ふえいと香け

天上

かきありやさそを天人の御退屈

けろりくらんとして鳥と柳を

枝おれや盗みあまのうそと大勢うり

枝の花をうと吹雪めとさし月を

初夜

急いむつと流しふく秋の夜

初夜

若月也とをうりまをあらつとせ

明日の夕つととるききぬら  
明日も元とくれろと泣き

姨捨をいゝ毛をたつて

吾人の山とす留はやきのの

巻

新う接るも我火造てハるのうけ

雪

あまていゝな雪のふりさうし

ありやくと雪ふくるとさる

犬もいゝがけとくまの雪のあ

梅

せやうな世もさくらならけ

雪とていづつとたりと暮

日出がさかこと一の散りも

と一音と見えや鳴ぬ甲の

梨の戸や控ぬいゝるんか

ひきの品もいゝるんか

五巻の口和らふ山家

新巻

涼しきや糊のかろくぬ

正統のあとかさくさるるに浴氣うあ  
魚ともや梅ともあらんりて涼

涼風やちるる一えいきりくは

○大村ち産の著しる正統院記(法字を二冊)  
全の初をえり考こ。田中吉山の東瀛珠光  
と書更を院の作らぬ時。その巻四  
とち産の編ちるのしめさるるを此記の  
序中のゆゑも海布のあるきんこんうあ  
略して讀さす。尚うして要をわらさす也  
正統院の古版と知らんともうらるる也此考也

+ 〆

正)

(六月の夜)

の今月の朔をみしとあふハニ流しな印ニ顆  
奏乃、余のち物産の印と作らハんを以つ

と始りてを(2)

寺印ハ寸餘有

ニ捺せん為也

六月の夜

あつる也



○大倉町村の紙本少紙一幅を譲りし事あるものあり  
山の幅を若くは搦へて家藏とす而村の人多  
その道印若干とあり而して其の畫いす  
架中よりありし北幅未だ懐く事あり  
の幅に比すん心老優るを云ふ

○部下各者店に因り書物、麻呂屋の  
巻を三葉冊と云ふ事に出、因り而して書物も多  
あり書物市場方より贈りし價湯勝す、大部  
の因り而くお云ふ事あり、  
書物の麻呂屋より、因り而して

ハ多くと價を論じし札を分る事あり  
都下の各店、所收を云りし、此の三葉冊の  
由を葉冊と云ふ事あり、  
浦んをわの紙中村と云ふ事あり、  
と贈りし事、  
幅に出でし事、  
家藏の印の摺り、  
市場に出でし事、  
書を二冊、  
一冊の書を





一ある中更々々四回の手をを減々と紙を  
(六月十日記)

○大隈は常々其幼少の古簡をを示して  
皆依りて入る物某に具へたる佐竹家の  
方簡に「中」に「徳」大隈ハ「大」  
の七あり、而して「一」無款の「政務」大隈  
を四ヶ條に「一」一「一」  
筆、一「一」  
とあり、削除を著したる所あり、方ハ「一」  
に「一」中「一」あり、伊藤、一「一」井上、一「一」

+

出入比、一「一」此あり、一「一」  
家、一「一」  
跡、一「一」  
減、一「一」  
候、一「一」  
略、一「一」  
志、一「一」  
得、一「一」







使すううくも手切をす。恐くも我全権が  
之様ふ不文合とす。并に連決の全権  
とす。せしむることの如き。う原因をあり  
らんとす。

尚ほ米四が聯の提議しはる。順序  
を誤る。そのまゝ先の敵を、討つる意  
を、互を誤り。而して止る。聯の題目  
入る。何人。う。入る。も。順序。する。日本  
の。これを。提議。せしむ。し。ハ。遺。域。する。意  
ハ。米。四。の。提議。を。否。と。す。ハ。英。佛。に。提

+

遠くも。日本。に。是。物。を。提議。を。す  
す。は。是。の。地。位。の。存。する。意。を。入  
を。為。す。ハ。ツ。り。ち。遺。域。する。意

暗に。西。軍。を。尋。尋。の。無。能。を。外。交。的。の。之。辭。を  
以。つ。て。不。の。め。り。し。や。

梅本林と早稲田の出身が。あ。井。健。中。介。ハ。早。稲。田。の  
故。授。心。す。の。文。部。省。の。中。介。が。あ。り。た。る。と。云。え  
は。ゆ。り。文。部。省。の。責。任。が。あ。り。た。る。と。云。え。は。あ。り。た。る。  
五。年。前。獨。乙。に。海。軍。と。す。と。あ。り。た。る。が。あ。り。た。る。  
洲。敵。に。内。部。日。獨。乙。を。終。了。し。英。毛。に。海。軍。四。年





高、西洋の如く駭愕するも、既に歴史を異  
りし子法を異にするも、於て西洋の如く  
吾働者の大不平、或る意味於て後継的の  
不平（日本は花とあり）故に設けい西洋の吾働者  
の氣勢（？）ハ或許我吾働者を刺激す  
るものせよ、文政を以て客せしむるに  
るものもあはる可しからん。

○蘭ハ、瀟々ハ印四顆早達ニ出来、四顆馬  
松瀬案と僅中人也の二顆を七余の言を  
ルリ、僕哈人の印ハ六朝の碑体と倣ふ



之を異ゆる名カアハ

比人ニ  
以て

好

育ち

育ち



成るん春意一画と  
辨るんとのつら



僕野人也

巾着名に居るが、此刻

の字

トコカノ 吾碑の 文字

似てよすがのやと

思ふにケヌボレミル

百人一人位面白

ふて呉れる名があれは

比合に 此

好

育ち

と

今更先主

此、僕野人の印ハ六朝の碑体と倣ふ

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31

この印は、唐の印の體に倣ふ、

其の西洋の如く駭愕するもの、既に麻の史を異  
 りて其の如く異りするもの、於て西洋の如く  
 昔働るの大不評、或る意味に於て後継の  
 名

一、W.C. Stanley: 宛定  
 新撰人物

刻あるを得るにあり、拙  
 案の真印ハ拙案寫と  
 辨るべきなり、似字  
 多しとて案の字と作り  
 未

六月十一日記

○此祝考案より上より  
 成るん春意一画を  
 辨るんを





文豪の奇禍

羽化生

松崎樵堂は、一代の文豪にて、佐藤一齋、市野迷庵、狩谷掖齋、山梨稻川、廣瀬蒙齋、渡邊衡園等と莫逆の友たりしのみならず、其の巨擘であつた。しかし人は人に十分を許さぬ故か、此の文豪ほど少時より初老へ掛けて辛酸を嘗めた者は多くあらなうであらふ。餘事は姑らく措き、二十餘歳の時は、聖堂の同窓澤九輔に達引いた爲めに、思ひ設けぬ災を醸して、アワヤ縲紲の辱を受けんとした。されど此の事は既に前號に載せられたれば、之を贅せず、第二の奇禍は彼れが既に老境に達した後の出来事である。その事は彼れが其の友人長鹽磗卿に與へたる書中に詳かなれど、その文は、近來刊行せられし『樵堂遺文』の中に漏れたれば、今茲にその大略を記さん。

急に眼醫を招いで診察を乞ふたが、芒の眸子を刺すもの無數にして、其の折れて腫神に留まる状は、恰かも芥が玉中にちて居るやうであつた。眼醫は日々來つて視、樵堂をば日光の煌々たる窓間に仰臥せしめ、兩指にて眸孔を上下に張開け、右手に銀鈎を携へて芒を拔出さんとするに、アハヤ鈎尖の觸れんとする一刹那毎に、腫子はクルリと逃れて、百方しても拔出し能はなんだ。樵堂思ふやう、「此の芒を抜去らねば、父母の遺體を不具にすべく、不孝此の上なし」と。依て日に激しき苦痛を忍んで、同じ手段を反復したれど、所詮抜き取るべき見込なく、眼醫は到頭匙を投げた。噫々樵堂が此の時に於ける身體上の苦痛と精神上の懊惱とは如何なであつたであらふか。思ひ遣るだに感然である。

既にして約二箇月を経過した、一日友人江間君舉なる者、遠方より遙かに此の事を聞て大に驚き、乃ち一點の良薬を送つた。樵堂悦で之を眼中に注いだ。スルト幸に芒は悉皆腫孔から抜き取れた。されど治療既に手遅れとなりたれば、惜むべし樵堂は、此の時より生れも附かぬ偏盲となつた。

の書畫高一幅をおち来りて、高秋田の山  
舟より、風秋より、是れも一色、をれ此の葉  
高きし、  
ん此画家の一人に、樵堂の某旅記に載せられたる  
傳を記す。高きし、  
北人名の實別に、青年の難、  
十月十二月十日、  
納言、  
母の姓、  
高秋田の山

の書畫高一幅をおち来りて、高秋田の山  
舟より、風秋より、是れも一色、をれ此の葉  
高きし、  
ん此画家の一人に、樵堂の某旅記に載せられたる  
傳を記す。高きし、  
北人名の實別に、青年の難、  
十月十二月十日、  
納言、  
母の姓、  
高秋田の山



し又丹古とて予と一二十六年三月二十日病  
歿し以行年五十五才

此人の身は上総の豪農江之氏の女は此の女  
ハ同様に上総の南画家也且つ存懐家也あつ  
た高橋宗平の弟妹也あつたと云ふ事ありて  
清不通應の的也女の姿あひを不便ひあつたと云  
ふは男装あつたといふ事

惺むの父長四郎を此人の血縁が事秋の  
下谷に住して居る時振きをきつて往つて  
死すと家ハかうぬぎひ、誰かそゝぬい

+

帰らんといふ事、自初尺酒徳利と撰く  
て入らまう秋田も能く井の皮包を掛  
て帰るの事此の事家もかうぬぎひのつた  
事又之生流の酒馳走の事酒も買  
つておきたりて長四郎仕出へて言ひ  
つけ酒肴をえり客をもてあつた事  
どろろう地走をしたのうていふ事あり  
といふ事

○永井雪村混雑出身の画家さん子も此の事  
おし位あり左つと歿してうたふ事ありて

かく九折、初め織菴、この以後、遠く雲、雪、山と  
此、友林の遊いしこともあり、此人の経歴、珍とすべ  
きものあり、前月北報に載、文井海海の一とて  
余との交り、手と揚けたり、余報後、此人の画を  
需むるを得ることあり、此、即ち此と云、北報  
を高くし、才あるものあり、聯名、画を、此、墨、以、  
也、より、これ、風、韻、あり、此、竹、こ、云、云

雪心、新、續、集、一、卷、為、清、澹、拈、借、問、此  
中人、寧、知、此、中、况

北報、價、四、十、四、と、云、而、田、方、画、を、代、物、と、き、し、手、も、云、  
+

○この唐、山、雪、因、家、花、を、雪、玉、の、書、中、池、永  
一、卷、の、即、講、上、下、三、卷、あり、價、三、十、四、と、云、村、の、  
手、の、後、つ、首、部、に、室、柄、集、果、肉、華、下、の、序、文、  
四五、枚、あり、送、答、一、七、吳、文、田、と、云、と、云、云、  
此、也

○六月廿三日、坊、方、方、館、を、訪、め、川、村、意、心、  
日、所、の、趙、氏、集、本、古、印、を、二、冊、を、得、たり、川、村、  
は、趙、凡、夫、の、印、若、干、を、得、たり、より、一、冊、  
得、たり、や、ま、ま、か、その、印、講、を、の、め、る、こと、ハ  
の、ま、ま、し、て、なる、に、似、たり、より、回、り、す、手、に、

入りてを快とす。意心のなげ文に又とん。意心不  
花の四十顆ハ海屋の無花、傳り海屋ハ嘉永記  
五年八月醫州中書に得たるものところ、亦亦  
根花を題の印を數十顆と花せし由え  
も序文にありとの此の印何れにありや、支那  
に於ても珍とす。坊凡文の原印の吾玉、海  
り亦あり名家に花てし、ハ古かへきも也  
他：一印謠を得。飛田石室角平翁文蔚  
の作る不、北人一号旭方とす。其首に題し  
て正印印謠とす。山本北山其庵の序跋を



載す未だ刻ある為人を評するをいと第也  
又改印の花平（花平）も亦珍なり。序文にあり  
又秋南游墨戲帖を得。この序文は山陽の評  
語者、尚オを載す。少年吉田弘文翁、心  
の所のものを縮刷す。珠帖も人もこの書を本  
本大の女のりし。今亦亦易に獲。うとてこのと  
オ多文求むを記し。回方を漁。格が珍とす。  
キとのありさう。喰い入る。先、次、燕、京、行き一印謠  
と題し得る物入ると出。一、三、五、をえん。ハ寸珍帖も、余の



説くに向のものをさす先づ心表に心投て名んが汪氏の編纂  
印本をえ感ふの跡に多き本をみるも場をくく形  
冊子体を崩して各巻に帖に貼りつけあつて一冊を一帖に仕  
即ち四冊四帖を二帖とすしあう装束は漢系に別地は粘を  
巻しあひも不形をえひつと遺儀の極也然れども印本  
の得うなきん流俗をくもあし<sup>流</sup>ん<sup>と</sup>多し<sup>心</sup>に<sup>深</sup>  
る機のあるべしとも思ふべし<sup>心</sup>に<sup>深</sup>る也十回とすよとを刻  
引うも<sup>中</sup>を<sup>中</sup>あ用<sup>入</sup>る<sup>序</sup>なる<sup>元</sup>終<sup>を</sup>の<sup>名</sup>印  
本を價のあくもく<sup>り</sup>十<sup>回</sup>と<sup>す</sup>よ<sup>を</sup>以<sup>つ</sup>て<sup>購</sup>入<sup>す</sup>  
ことし<sup>し</sup>あ<sup>る</sup>も<sup>信</sup>ち<sup>て</sup>文<sup>本</sup>を<sup>入</sup>る<sup>も</sup>我<sup>れ</sup>て<sup>回</sup>り<sup>余</sup>す<sup>珍</sup>

を蒐集する程を<sup>四</sup>起<sup>の</sup>ん<sup>も</sup>初<sup>る</sup>高<sup>原</sup>の<sup>中</sup>の<sup>一</sup>七<sup>を</sup>  
一<sup>日</sup>部<sup>南</sup>千<sup>一</sup>と<sup>い</sup>此<sup>考</sup>こ<sup>と</sup>一<sup>笑</sup>ん<sup>お</sup>す

古田(正)叔後其費(者)中<sup>一</sup>印<sup>林</sup>を<sup>恨</sup>あり<sup>勿</sup>塔  
摸<sup>なる</sup>ん<sup>も</sup>飾<sup>り</sup>不<sup>杜</sup>志<sup>の</sup>物<sup>あり</sup>て<sup>實</sup>の<sup>中</sup>  
歯<sup>牙</sup>を<sup>掛</sup>く<sup>る</sup>も<sup>さ</sup>る<sup>も</sup>の<sup>さ</sup>る<sup>も</sup>今<sup>世</sup>に<sup>未</sup>だ<sup>四</sup>  
の<sup>り</sup>ん<sup>此</sup>模<sup>本</sup>を<sup>日</sup>添<sup>え</sup>一<sup>小</sup>題<sup>を</sup>壯<sup>を</sup>豆<sup>す</sup>し<sup>と</sup>ん<sup>ん</sup>

大正八年六月廿四日記

の<sup>註</sup>法<sup>二</sup>十七<sup>則</sup>の<sup>許</sup>業<sup>著</sup>す<sup>所</sup>余<sup>其</sup>の<sup>後</sup>商  
り<sup>て</sup>高<sup>味</sup>ある<sup>を</sup>愛<sup>す</sup>閑<sup>に</sup>棄<sup>して</sup>寸<sup>珍</sup>帖<sup>に</sup>細<sup>考</sup>  
を<sup>以</sup>つ<sup>て</sup>寄<sup>り</sup>帖<sup>に</sup>半<sup>以</sup>上<sup>の</sup>鉛<sup>白</sup>を<sup>存</sup>す<sup>依</sup>つ<sup>て</sup>今

心の漢二十餘刻を採し之れを漁後と命し推後  
 漁後の一不転成る、則ち之れを小轉座の圖書や  
 加ふ、但し万刻、變とする細考よりを任す  
 成ふ、六字の巧拙を論ずる、河川の海あるあり  
 唯此拙速一書を自和せし目録一行を跋やし  
 得ざるを徳とす一冊

六月廿四日記

○物價の騰貴に付あり親工賃増し増加の成る  
 處止了る所を知りて、状態を以て其に法今此の大  
 元より、此の者印刷多し、故に既往五十年の  
 比較表を心り見ると、たの如き結果ありて最高

漢紙ハ七割増加し、最低に於て二十二割の増加  
 を見る、即ち平均九割ハ分の屋の増加あり

大正三、五月	二七五	四八	一〇三〇	五二
大正三、五月	八七	一五	四二八	三二七
大正三、五月	二七五	四八	一〇三〇	五二

○此の歩居印紙七冊一帙を賣りて來るものあり、是  
 歩居の田山大正の難あり、余此の古名の冊子二を  
 す、之れは多く自刻を収めあり、而して今も物價の  
 七のころより、支那名家の印紙を収め、昔首法四  
 流家の序文四五あり、歩居に大正の跋あり、跋文  
 一、跋するは、歩居の印紙を搦し、七の如

この時のう也、乃ちの次十五年、此の所の印謄也、  
正大逆の門あるも、正大逆の印謄あること  
を證する余の實目なる、之れを始めてとす、即ち  
余所花のもの、と今く同し、之れを知り得たり、  
乃ち公指動き、辨め、及中、互くとす、

同時東坡の醉翁亭の寸珍墨帖一を購ひ、  
有る、殊味家、どう巧又、梵漢をえ、か精産  
中、のもの、(此)ありとす、(六月廿六日記)

○村に考名に於て、宋本樂善録五冊を觀、其  
に日本也、此考、二、三の花印を見る、善門院



の長方形印の外、伊依早氏の長方形朱印  
を捺す、米澤本、之れを依伊依早の印と見  
る、或ハ之れ、直江與流の四花と見、卷首  
上部欄外に、二字墨書あり、惠日西河の自  
寫ること、首卷に、足利代の傍の記する所、  
徹し、のう也、此考、あるの、花の、と見え、  
例の、こゝろ、各、家、意、お、さん、上下、部、共、切、り、  
の、ある、場、あ、る、し、支、那、之、考、早、く、亡、心、  
流、布、の、二、冊、本、抄、録、本、と、見、ん、此、考、價、貳、千  
圓、と、す、



に初の河部移書(遺)印 なるゝ第のき。巻  
き刹那：助け得ざるを 歎ひし之れと名家私印諸  
中入印帳を収める共々 実歎を丁寧保蔵す  
つこころ、あるべし、

六月二十七日録

○今方放棄中 珠璣客に於て 蓮陰茗話二冊今  
本二冊を購ふ 備後立石久文の漢文隨書として  
整頓し古賀洞庵の活版あり 半葉尾三行の  
活版あり 昔首表紙裏紙方形の印あり 文三々  
福山藩五郎氏花方記 里内を以つて持す 未だ  
久文の自書あり 或や否やと 洋字もせざらん 此人

+ 〆

悉くするべし たりとすん ぬる 自書あり ぬる  
○余未だ四五の方を見し ことごとく 遺せん 判し  
雅きのみ、思ふに 此方刊本 入無らん 其の録す  
所 和洋の事に 渉り 著者の 活版を 窺ふべき  
ものあり たり、北以世良大一の遺書 七々印 是  
其由に 古賀洞庵の 筆蹟を ありし 古の 花干  
あり、いん 其一より、世良の 古賀茶屋 門下の人  
るん 此類のもの ありし 世 外、琴指  
法と 思ふ 言を 一冊を 購ふ、いん 古賀洞庵 自  
書ありし 其尾に 大一の 活版あり たり 在洞庵

先生手寫拾遺一卷慶應元乙丑年六月旬一日  
謙堂先生所賜于六一也」と小菊本無異本也

(六月廿七日)

○神田の南竹録に都下方録の事あり、行七逸  
ふ、珠奇の事あり、十珠を十行と稱  
入ん、物と記するものあり、但し、  
の日光書)や、後三十二枚寸珍、大文ありし、  
此(編を抄彩も、表を金地綴子、横里柿袋入  
ハ考冊あり、その事亦、抄巻中の、その事あり  
又是、唐を寸珍奉燈新達四冊、玉前、

+

語、似るものあり、初めを記す所也、外  
醉洋を印譜三冊(寸珍)と題し、刻る末に、  
邦人漸派の体

坊内、文求を、人、  
坊内、文求を、人、

後刻を、  
後刻を、

○山陽印譜寸珍二冊を、集り、  
白山主人の序次も、  
外を、  
尾記あり、



○余の援助しつゝある稀古複製を今本月を以て一年  
を行ふ、乃ち本月配本のもの左の如し

○余前年池之端琳琅閣に於て古拓の題碑本四  
帖を得、珍新数年今ハ再之し、唯此明次十七八年  
ハ次某雜誌に載せる白紙縮刷四十数枚今  
尚は存す、此本原刻の趣を測ると、若も、尚大  
略面目を窺ふを得、且の縮刷のよき妙の  
あり、さうして此のもの今ハ獲可らず、或る備々  
支那装潢の小帳四冊一帖を購ふ、中ハ王丕の方  
四種を収め、而して皆其の大きき、望三寸餘

# 稀書複製會報告

第十二回 大正八年

## 第十二回配本解説

萬歳躍 一册(原永田文庫藏本)

本書は萬治三年七月刊行にして今出川助左衛門版なり。序文に「萬歳躍」とありて中には「ゆうほ流躍くどき」とあり。收むる所の唄数は長短合して十八篇あり。本書の序文を見るに「躍うたは人の笑ひを種として萬のクドキとぞ成れりける」と記して唄の内容を擧げ。又「爰に近頃、友甫と云る人あり略皆此師の口まねをし侍りて云々」と云ひて、當時流行したる口説節の友甫と云ふ者に依つて起れることを明かにせり。又挿畫には野郎歌舞妓の玉川千之丞、村上久米

之助、藤村半太夫、多門庄左衛門等あり、殊に庄左衛門の六方姿の如き當代の有様を示せる面白きものなり。此の躍クドキなるものに就し「新竹」の三には「躍總本寺道念が道念クドキ願以此功德今日の切狂言」と書し、又『世事談』には「道念山三郎と云興禱の音頭あり、貞享の頃、盆の躍口説といふをうたひ出したり」とも記し、躍クドキ即ち道念節は山三郎に始まれる貞享年間の産物の如く思はれ來たりぬ。然るに既に貞享より二十餘年前、友甫に依つて謠ひ出されしものにして、道念山三郎の創始にあらざること此書にて明かなり。されば之れを芝居の方に引附けたるは山三郎ならん歟、否、唄の文句中千之丞、半太夫等が四條河原山村座の舞臺に於て、此の躍クドキを演じつゝあることを證明すれば、芝居に結び

後未と礼し語く、欧米の強國も寧ろ外ヶチテ



附けたるも亦た山三郎にあらざりしなり。  
以上より推測すれば、道念山三郎は此の躍クドキの  
上手にて名聲を博し、本家たる友甫の名を厭倒して  
遂に後世躍總本寺とさへ稱せらるゝに至りしならん  
何れにしても本書の残れるを以て躍クドキ即ち道念  
節は道念山三郎が其創始者にあらざる事を確め得た  
りと云ふべし。  
此書、原表紙、題答ともに散佚したるを以て、今假  
に之を補ひたり。

風流謠年代記

一册 (原 松廼舎文庫藏 本)

本書は作者詳かならず。序文に萬みん呂、跋文に畔  
李齋の署名あれども、其の何人たるや明かならず、  
奥附に依つて寶曆七年正月刊行の江戸版たることを  
知る。

本書は謠曲内外二百餘の題目と其の内容とを、巧み  
に編み込みて年代記體に擬したる戯述にして、鼈頭  
に謠曲の詞章の一句を捉へ來り、之に四十六圖の見  
立繪を添へて感興を惹きある處、作者の考慮を費し

たる工夫と見るべし。

當時謠曲は都鄙を論せず上下を通じて流行し、彼の  
寺子屋の如きも之を兒童に授くる一課目と爲したる  
ものありき。されば宴席等にて小謠の一つも謠はざ  
る者は、肩身の狭き感ありし程なれば、随つて之れ  
を戯作の骨子に扱ひたるもの多くあれども、謠曲を  
年代記體に戯述したるは、蓋し本書を以て其の始め  
と爲すを得べし。

第十三回配本豫告

犬百人一首 大本一册

寛文九年版の繪入狂歌本なり。狂歌集としても古  
珍本たるのみならず、その晝は風俗の參考に資す  
べきものなり。

田下名人ぞろへ 寸珍本一册

中本形赤本の標本として、さきに『桃太郎』を復  
製したるを以て、今回は小形赤本の代表として表

一寸書三四分許の、改裝寸珍帖と云ふ得べ  
きものあり。之れを外して別に装潢し、  
其のがらにの紙牌を以て箱め、茲に一種の法帖  
を得たり。其の紙本を保存し、想ふに、いん唐物  
利用の一法なるのみならず、如是して其の本を保存  
すると共に、毎世装潢の美の筆を、文庫方の具と  
するに愧ざる也

六月考行記

○六月ある大隈侯を訪ふ偶々、未冬を以て侯と誤  
笑する一時有りしを、侯の平和令の  
侯末の就し語く、欧米の強國も寧ろ外ヶチテ

敵四人の財産の聯合典<sup>り</sup>に存するものも皆没収  
せしむるを以ては、<sup>た</sup>独人も亦此厄<sup>の</sup>に過  
ぬるものも、<sup>た</sup>取らぬも亦一種の謝所<sup>なり</sup>、斯  
く没収を以ては戦争に多<sup>く</sup>損害を或許するも  
ゆ<sup>つ</sup>償いんとするもあ<sup>ら</sup>ぬ論<sup>なり</sup>、今以て建代  
の謝所を罪<sup>せ</sup>ざるも、<sup>た</sup>敵中の個人に行<sup>は</sup>んとする  
たる<sup>も</sup>其の限りも、日本の如き講和を成<sup>し</sup>て於<sup>て</sup>  
新<sup>し</sup>ることとをこそ要する<sup>なり</sup>、<sup>た</sup>是れ<sup>も</sup>四海の公道  
とて權利正義とて、<sup>た</sup>ち<sup>て</sup>是<sup>れ</sup>を培<sup>ふ</sup>る本家本元の列  
強<sup>なる</sup>果<sup>を</sup>と<sup>り</sup>て、<sup>た</sup>せん<sup>の</sup>例<sup>の</sup>ことと<sup>も</sup>、<sup>た</sup>妻<sup>の</sup>父<sup>の</sup>

黙<sup>り</sup>こ<sup>の</sup>一<sup>の</sup>は<sup>ら</sup>ぬ<sup>も</sup>、<sup>た</sup>又<sup>も</sup>獨<sup>り</sup>帝<sup>の</sup>の<sup>進<sup>を</sup>行<sup>は</sup>し</sup>  
たる<sup>も</sup>、<sup>た</sup>徳<sup>を</sup>罰<sup>を</sup>を行<sup>は</sup>んとするも亦た風  
を<sup>さ</sup>す<sup>る</sup>、<sup>た</sup>個人的<sup>な</sup>豪傑<sup>の</sup>、<sup>た</sup>兼<sup>て</sup>能<sup>く</sup>し<sup>て</sup>  
逸<sup>つ</sup>て<sup>は</sup>其<sup>の</sup>人<sup>を</sup>を<sup>な</sup>す<sup>る</sup>、<sup>た</sup>も<sup>不<sup>の</sup>と<sup>す</sup>る</sup>、<sup>た</sup>今<sup>の</sup>個  
人の性格<sup>の</sup>ある<sup>に</sup>、<sup>た</sup>豪<sup>を</sup>する<sup>も</sup>之<sup>れ</sup>を<sup>目<sup>の</sup>上<sup>に</sup>と<sup>す</sup>る</sup>  
べき、<sup>た</sup>時代の<sup>の</sup>あり<sup>は</sup>、<sup>た</sup>敗<sup>の</sup>後<sup>の</sup>獨<sup>り</sup>に<sup>前<sup>帝<sup>を</sup></sup></sup>  
つ<sup>ま</sup>ま<sup>に</sup>、<sup>た</sup>その<sup>の</sup>こと<sup>の</sup>、<sup>た</sup>せん<sup>と</sup>語<sup>る</sup>、

○七月一日の夕<sup>に</sup>と平<sup>を</sup>和<sup>を</sup>を祝<sup>す</sup>る<sup>も</sup>、<sup>た</sup>何<sup>と</sup>も<sup>も</sup>、<sup>た</sup>悔<sup>を</sup>快<sup>を</sup>を  
言<sup>え</sup>、<sup>た</sup>用<sup>を</sup>毎<sup>に</sup>、<sup>た</sup>其<sup>の</sup>を<sup>行<sup>つ</sup>た</sup>、<sup>た</sup>あ<sup>ら</sup>ぬ<sup>も</sup>、<sup>た</sup>出<sup>て</sup>、



河川の流し流しをみるに果して委細を細く流しを  
大要と云く、北人南浦原郡麻久河と云村の人を  
其家ハ村松藩の大庄屋なりと豪家なりし此村ハ  
大須美の姻戚池谷氏の所村傍所村と其此近の  
リしうなる段河と池谷とハ相谷の河柳なりと云きり  
ハ津来しなり。池谷の丈七五尺六七寸也云長幹  
肥大の人なりしが池谷の長幹なりと池谷と相敵す  
るは是なり唯此池谷ハ慶安の腫格なりと云  
と傳ふぬ人ありし。池谷ハ才ハ健母の出なり  
一家より而創なりしもの。家智をわすれ



リ自ううハ池流ニ味をとり。初め行田雪津  
花鳥をそむく雪屋とハ田名田村なりしが後田雪  
屋と共ニ上方より池谷梅屋の門に入りたり。雪屋  
ハ十年セ其つは池谷なりと云きり。池谷ハ志を花鳥が  
池谷ハ以却て池谷と云ふ山方と修業なりと云  
南の山華山つ下の福田幸香山方家と云きり  
池谷ハそのハ私淑しと云ふ其書山ハ其考の  
氣あり。或る人池谷ハ向うと云きり。私淑す  
るハ其ハ一層考ふべきと云ふ  
と忠告を寄けり。支那画を学ぶに云ん



長尾海田元祖の怕語改撰と云ふものあり上  
頭と七絶三首を題する余海田の畫をぬむ架  
中既二幅あるも六之れと購ふと云ふ大正八  
年七月四日也

○七月六日海田教業中朝公伝一寸珍本を通り  
豆本一帖を得、望一寸七八分横一寸二分許の折本  
と云ふ者經全部を細刻し其もの天保六年乙未春刊  
に川淡字抄本式花紙とあり又朝令信平刊とあり又卷  
尾に秋義原暈縮臨とあり而して宋版書經臨本  
の題字を貼る、体裁甚に白也、喜ぶし購ふ、但し

懐古、宋版臨臨と云ふもの、字は秋義特有の正楷を宋  
版式の趣を翻くことな、然れども豆本中此種の七の無き  
紙にヤ、也

○同日高橋義彦より一方を乞ふに承る、中二  
一道の拓本あり、こんど、鋤子、建人といふ支田  
震仰の終焉碑下より収めたる廢徳を刻したるもの  
つとち、刻もた、高橋也、廢徳ハスリートに刻し  
たものなり、震仰の著利根河治、河治一冊を  
花の北の刻石を以つて其の趣を掩らん趣向也

大正七年一月二日 劉少金 劉少金 劉少金  
田東極原 於于 劉少金 劉少金 劉少金  
之 劉少金 劉少金 劉少金 劉少金  
不 劉少金 劉少金 劉少金 劉少金  
經 劉少金 劉少金 劉少金 劉少金  
又 劉少金 劉少金 劉少金 劉少金  
蓋 劉少金 劉少金 劉少金 劉少金  
所 劉少金 劉少金 劉少金 劉少金  
口 劉少金 劉少金 劉少金 劉少金  
八 劉少金 劉少金 劉少金 劉少金

○今月八日 上海の徐星園の稿

一、印五顆、蓋の刀口を以て筒の端に括弧を以て  
来る、即ち左の如し  
(七月三日記)

未央を以てする也



未央



獅子宮



翠千傳



秋竹堂



箱

○十四の柱を以て印三十顆を以てし、其事を以て中  
に鐘形、魚形、人形、靴形の鈕を以て余の架中  
に以てし、無きものあり、架中のものと同鈕を以て鑄文  
同し、こゝろ中のあり、公指動くとそも價不廉



多うのちいさふ梅ひんが、標の文海つゝは  
 購ふゝあえん典、花若の前身四十餘款を  
 余の遺りなき精殿梁園こ、此人は年致し  
 今より未こ人の年入在り



人物鈕  
背に  
あつと  
あふ



鐘鈕



人物鈕  
文在



壽



獸鈕  
鑄文



獸鈕  
文在

獸鈕



人物鈕



獸鈕



念二  
御  
印  
文

魚鈕





以上の内〇印を改訂するもの筆<sup>家</sup>花<sup>道</sup>と鑄文  
 同じ似し鈕は異し又鐘鈕の鑄文と曰文  
 一と鈕異するものあり 鈕を二つある鈕印の  
 鑄文と曰文一と鈕の異するもの一あり  
 〇七月十日四五の人を備あて庭中の池を浚ふ  
 池を藪あつた骨を掘き出さる僅うん五分の  
 一を存す、池地をうらうらきと見え涼味又水

面とと来り、偶々一人の方蓮を貯るものあり  
 数茎を大上りする、風波掬まふし

〇古池の枯屋用をとりて三本大の井田印謨をお出  
 す、別ち堀の北印謨、井田生翁の所より、巻首  
 三書集の題あり、井田の和紙あり、その和紙ハ

すしとけいぬおのこの女のあせいとさう  
 花のふしや 印のさき羅しと 井田

とあり、印の注のつらる刻あり、こゝに入らる、印七後  
 に出る、印謨の板あり、増校あり、余の初  
 めとある所也、井田の形より、せ、る余の

久須美雪堂に  
阪田鶴峯の子情を向ふ

校：校す、改をまへし (七月十日)

○かの侍柱者一々畫冊を遠くし来り見す、道先  
年間侍人楊少卿畫する所也、山あり花あり  
海あり華波あり、其下に画者白草の題  
ありあり、字句の眼、篆字あり、雅也、其  
尾に謝修あり、余の精筆あるを誨るんやうし  
其、七十五筆を校し、其、精、座のよ  
とす、笑つて曰く、常世画家の悦ぶるべきは  
法之れより十倍一七倍七六十倍す、詢とん、

+

三三

○湯侯半日ゆんくと得来りたる、其、鶴屋の者  
付と、改と境うりして、其、物、年号を翻  
くと、其、文、政、の、よ、と、え、の、僕、道、采  
、あ、と、と、五、人、の、物、散、供、す、と、雪、の、  
こ、い、ぬ、め、を、保、存、と、使、す、と、ま、

○例、四、五、の、方、と、得、曰、く、陣、え、焚、山、の、武、情、  
枕、涼、記、帳、を、一、紙、何、人、に、刊、せ、ん、と、い、ふ、  
も、陣、の、行、者、を、名、る、に、法、先、の、標、也、(中、書)



護送せしめられたり。父の罪を以て監禁せしめしむる  
刑ハ死罪を免れん終身監禁をせしめしむる  
未大統領ハ死刑にせしめしむるを條件として裁  
附するんを同意を表明ししむる前帝の子息等  
ハ父の身代りたることを請ひしむる獨四の  
方及某々ハ罪を一身に負ふべき事代へんこと  
を申し出たりと云ふ所のは多シきもの大なる  
報を乞ふべき事想あり。口は父の  
事と護らばるる心也と云ふこと也。四五年前の事也

とも今と云ふて其の事ありし人の末路を  
獨りして一敗地に塗らるる前帝を怨むることを  
せしめ前帝のめめを述べて其の事ありし三代統く  
皇室の恩義を感ずると云ふは其の國情を  
我々の心に似たる事あるを想ふべき所也。日本  
のことも獨りして教へしむる言ひ其の關係  
ハ英佛との事との執と異れし。お附えに身裁  
ありし手傳をししむる言ひ今と云ふる力に  
のみ前帝を罪する事との執の異なる事ありし  
併し其の事と執と異なる事ありし事と云は









ハる八龍の耳聴あるは山崎免治中 河内権兵衛  
二博士のいふ大隈侯能久男の海防を、山崎侯  
士の親戚能久侯の<sup>能久侯</sup>海防を論じ、能久男  
の音動あると書きたるを、河内を協助する様其  
の必要を論じ免後の忠告出さぬこと其新入  
南人と戦ふこと其書を<sup>能久侯</sup>河内(能久侯)と  
以て申すも、其書を<sup>能久侯</sup>河内(能久侯)と  
と稱べざること四年の長きなる山崎侯の  
進とし、海防にまこと二の方面に海防及化核其  
と決別し、能久侯の<sup>能久侯</sup>河内(能久侯)と論じ大

+  


隈侯七終り(河内)能久侯をえさう、新入海防會  
と今後継続する免を<sup>能久侯</sup>其の第一回し  
一之ハ免の成印一々

今終り後河内山崎を<sup>能久侯</sup>河内(能久侯)の  
凡月書に免を<sup>能久侯</sup>河内(能久侯)の  
代河内(能久侯)の<sup>能久侯</sup>河内(能久侯)の  
下世を<sup>能久侯</sup>河内(能久侯)の<sup>能久侯</sup>河内(能久侯)の  
免を<sup>能久侯</sup>河内(能久侯)の<sup>能久侯</sup>河内(能久侯)の  
免を<sup>能久侯</sup>河内(能久侯)の<sup>能久侯</sup>河内(能久侯)の

の山崎侯の海防、能久侯の免を<sup>能久侯</sup>河内(能久侯)の

の教の中核は米田の集中である。既に米田  
らも金に愛は六十億圓を以て集積す。乃ち世界の  
全化貨総額の三分の一は米田の手にあり。大隈侯白  
く世界の金の産出の半を以て集積し、  
此の半を漸く減し、米田に集積せしむるべきなり。  
と、

の今期大隈侯を以て長期的な法を、侯侯の無  
印維子橋の宅の事、及ぶ(此印は佛西に後  
録し)侯の事、及ぶ。維新後西洋式の家  
を造りたるは、大隈侯米田侯、今よりして、之を

洋式建築の始を云ふ也。馬場も印中より  
之なるは、お側へ極のありしを、おもしろし  
るは、も實に極の極のつく、樹るは、花のにお  
七しり味ある也。そのこ、自分も留戀するも、  
也。云ふ、自由の事、及ぶ。之に改訂し、茶  
室の事、及ぶ。侯の笑つて、あはれ、此の早稲の  
の、杉の家、田印、及ぶ。之を、  
也。其の、行き、及ぶ。印、及ぶ。之を、  
と、及ぶ。之を、輸入の珊瑚の粉末を、  
五月、及ぶ。之を、及ぶ。之を、及ぶ。之を、



義を執るとする御意向より、人種差別の  
撤廃を終りに行つてゐるもの、海軍も別艦  
も熟慮と、此の二大問題と云つて揚げて先  
決問題と呼んでゐる、清衣の侯の見解に  
候又日本民俗の血の純潔なることを論じ且つ  
其の純潔なるもの、徳々の神祕を久し、勤王も  
ハ腐敗するものある、日本に於ては幸ひ  
えんことを論じて、日本も貴族の階級  
あり、百姓と其に隔絶するもの、貴族の子孫  
と異なる結果、其の妻の増殖あり、其の

+  


何れの世であるかを論じて、  
階級の混濁して互に疎遠して、  
收を志す、貴族の子孫を  
あつて、  
二、西洋の貴族上のもの、  
行ふ、其の妻を收とする、  
どこまでも皇族系統の血を、  
道を、  
ウエールスに、  
決海軍の物資として、  
遊生流を、

ことわざ、日條の士友連、皇族の血、いんご  
もつあうりとぬき心らうとまんを換せんとい  
し太子の血を一滴貰らひ受け 顯微鏡  
下を之れを換しる言話ありと語り

山崎塔士、羽河の戦多、開院の甲初母、獨  
英の如き、治回らるる至、質を吸収するに大努  
力を尽し、ることを説いて、或ハ其の機、の  
救済、或ハ宣叙の、を、利用して、多々、  
を、出して、先、換、者、に、換、の、を、い、ことを、初、説、せ  
し、め、ら、う、と、い、ふ、又、外、回、の、旋、定、も、同、し、方、法

その其の機、の、硬、質、を、ま、ま、上、げ、ん、其  
の、引、筋、を、出、し、る、紙、幣、一、つ、を、特、に、ぬ、き、を  
謝、する、文、言、着、く、に、自、回、入、る、所、を、い、ふ、  
其、多、く、を、ま、ま、を、記、し、ち、り、と、云  
ふ

○自回、の、神、と、一、竹、歌、に、板、垣、向、七、世、を、ま、う、に、  
一、代、年、族、を、ま、ま、に、換、し、に、廣、古、あ、う、と、遺、子、に、  
さ、し、し、に、言、語、を、出、す、美、ん、と、ま、ま、に、い、ふ、  
版、で、餘、額、あ、う、と、ま、云、へ、さ、痛、ん、の、知、ん、の、  
年、政、中、の、難、い、を、獲、れ、創、り、原、因、と、云、ふ、説、也

ある、まゝう死因をんは字平う死に案七ある、あ  
り買傷し以の制傷を縫治し以のう後あ男  
守ひあつしとまふことし跡ひあふ、其の縫治の  
仕方がよきとまふの为め、<sup>跡</sup>後の禍を可し以とあ  
ゆつて、後存七而自刺<sup>跡</sup>、まつまふ、係し庸  
醫の不手際が今入延んし現んつうえんと  
扱の巧拙、教えんとして、せ教ひ得ぬこと、このて  
う、南を河海自由傳

○淡路橋岳の遺印を搦し、印講を牛中七老小指  
る中、こ豆んと欲し、今津八朝、托す、八朝舎

の印冊を高くし、寒月をゆのえ搦し、以次以了  
す、えんん十三四款あり、皆自刻と見え、椿  
岳一派の風味あり、多る偶々、信守八條を印  
刻し、皆ハ印講を講め、おんをその人の依り刻  
ハ、おのふと、毎印、一石を所す、地城甘藷也  
の註あり

(七月十日記)

○本間平峰の遺印、其車部、漸く跡を  
え、跡後とて、迹と都あり、おち込ます、古池を  
日一幅をおく、長條堀、こ、查士標の山形を  
信守、こ、その下部、平峰の遺款あり

晩年の節々を元し、（七） 志をなさん子債四十五円  
とある。望平峰の畫の漸く重んじし。 櫻木月  
（一）

○前島鴻爪の記を根を作るとの公前峰  
古流人浦系にありし起る。余興に。則ち  
五七の前、上面の某意に一冊のお話合を字  
とまし海に家鴨の序と大略。定めの、凡そ或  
ニツの考を余強う。此り才丹一巻目七  
中一と検閲し終り。公前自中一の自叙  
傳に於て七の年頃。及び。其の以後の行

可し。自分共のあつた人平中。是非完結の  
ふしと折。編んてハ勸め七一なるが終り定  
結るもさうしハ直感。供しぬ。今十年後  
のこの材料を蒐集すること強う困難な  
事なり。先んて以前のものにありし。切實な  
事と徳無き事とを材料に窮することあり。  
公。史部右成務の所する。何事のありしこ  
際うなる。多々の交際を捨てるん。詩仙活  
紀行、狂文、新書下。オウし本傳に入ん。こ  
ちりとも無きある。これと七の約四五十枚あり。

北条の女のハ余みづから編纂ありて余の如く  
こととせ加くし、紀念を採中へ入るべき歎編  
纂ありまほしと授る依り木渡邦と頼み  
んじ、余の終昔目を必要するさふかむ七句

(大正八七月二十日)

○東京新報の新聞に保存用の複製と其のなる所の  
紙と紙と印刷し 毎月お返しありて二月分書  
立十製しそお望のみに配せんとするさふかむ七句  
其の元をの紙布と云ふく、これハ大体よき計  
畫あり、たゞハ保存を要するものなるも七葉ハ

保存の困難なるものなり、固者録に格しすまは  
り況んや著者の家ニ格しとや、北條剛ハ野々ハ飛  
ぶんハ難儀と曰候き、且つ此と流すものを  
附すともえんハ油法也、其の元をハ冬に居の  
りえここに収めり





以下全て

白紙



